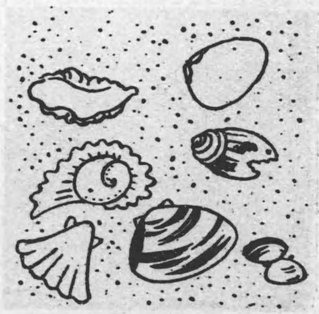
544
96

始

第三

貝殼追放

水上瀧太郎著



東京
東光閣出版

14. 9. 18
内交

344-96

第三貝殼追放目次

○子供の眼と大人の眼　一
「含羞」の作者　三三
所感　五七
○友人久保田万太郎氏　七一
都新聞讃美論　七五
畫家仙波均平氏　一〇五
帝國劇場の質問に答ふ　一二九
○友はえらぶ可し　一三三

紙屑　一五三
○はじめて泉鏡花先生に見ゆるの記　一六一
○永井荷風先生招待會　一八一
或日の小山内先生　二〇五
築地小劇場に就て　二一七
青山の家　二三九
我家の犬　二六九
倫敦時代の郡虎彦君　三〇一

裝幀　小村雪岱

第三
貝殼追放

大人の眼と子供の眼

あらゆる物を珍しく見、一切の物事に驚く子供の心はしあはせであると、何時始つたのかばわからないが、自分は永年さう思つて居た。すべてほんとに在る物よりも、大きく、立派に、美しく見る子供の眼を、一昔もふた昔も前に失つてしまつた事が残念だつた。

禽獸蟲魚草木天文時候――何から何迄日毎に新しく眼に觸れ、耳に聽く事が、未だ色情の惱ましさを知らぬ水々しい肉體の發育を刺戟するものゝやうに、全身に喜びを傳へたのである。春になつて木の芽が萠え、蒲公英、菫、茅花、土筆、五形花、蘖蘓、春菊その外さまざまの名前を覺えるだけでもひとゝほりで無い草むらに、蛇も蛙も蝶も地蟲も天道蟲も、いろいろの光り輝き或は又澁くゝすんだ背中の色をあからさまに、踊り、飛び、のたうつ姿の面白さ。百鳥は空に交り、けだものは地に

孕む目のあたりの自然の姿を、人一倍大きい眼をみはつて驚き眺めたのは誰だつたか。行く春の物の哀れを知るよしもなく、夏は又池の金魚の浮藻に腹をこすりつけ、夕燒の空の軒端に蜘蛛の巣を營む事を只管不思議に思ふばかりであつた。秋、天の川の遠く迄心を誘ふ夜、蟀、松蟲、竈馬、鈴蟲、蟋蟀、がちやがちや、すひつちよの啼きかはす聲に耳を傾け、更に又目に觸るゝすべての物のすがれ行く冬が來て、やがて樂しい正月を迎へる事を何よりも待遠しがつたものである。すべてが單純に樂しかつた、笑ふ事も、怒る事も、山清水の湧くやうにせきとめられずにほとばしり出た。

しかし、そんな事よりも、もつと深く心を動かしたのは、矢張り人間である。小說家になる下地は充分あつたのであらう。しかも其の人間をつくづく感心して見たのは、生きた實物によるよりも、幼い自分が好んで集めた錦繪の影響の方が先だつた。繪草紙屋の前では自分の足は動かなくなつた。駄々をこねて、どうしても購はなければ承知しなかつたものである。剛健なる明治初年の人々の觀賞に適した筆力餘りある月岡芳年の畫風には男性美を感じ、新時代の文明漸く根ざし深くなつた時代の好尙にかなふ優婉なる水野年方の三十六佳選に女性の美しさを知つたのは、たゞに審美眼の芽生ばかりでなく、同時に英雄崇拜女性讃美の第一歩であつた。

神武天皇の御手の弓に翼をやすめた鳥の存在に何等の疑もさしはさまず、金毛九尾の狐が美女とあらはれて宮殿にかしづく事も、凄艶極まりなき事として、眞僞を疑ふ心などは起さうとさへしなかつた。天子樣は一番偉く、太閤樣はその次に偉く、武將は强く、學者は知らざる事なく、女は誰しもやさしき心を持ち、大人は誰でも子供より偉いのだと確信して居た。

さうして、其の美しいと思ひ、又偉いと思ふ事は、批判を超越した絕對のものであつた。曾て「貝殼追放」のひとつとして「女人崇拜」と題する一文を公にしたが、それは自分の幼い時、世に女程やさしく美しく、一切の邪惡な心に遠いものは無い

と思つた儚ない夢想の回顧である。

家の前の原つぱは、築山や泉水のある我家の庭よりも廣々として面白く、町つ子と遊んではいけないと嚴しく云はれながら、毎日々々拔け出しては、その町つ子と遊ぶのだつたが、何事にもませて居る町つ子の一人が、女性に對して侮蔑の言葉を用ゐた時、自分は心の底から憤つて相手にむしやぶりつき、遂々泣かしてしまつた事さへあつた。それ程女を尊びなつかしんだ。

あまりに尊びなつかしみ過ぎた反動として、夙に幻滅の悲哀を感じ、大人になつた今日此頃は、女の淺はかな事がはつきりとわかり過て來た。但し自分の女性觀は、他の機會に披歴する事にして、茲には全然除く事にする。

これも町つ子に教へられたのだつたが、往來を通る見ず知らずの馬車の上の人や車の上の人におじぎをして、先方がうつかり禮をかへすと、手をうつて喜ぶいたづらがあつた。日清戰爭の頃で、且陸海軍の軍人の澤山住んで居た土地柄、勳章をぶらさげて意氣揚々として通る將校が多かつた。向ふの方から、金モオルを光らせて來る姿を見ると、車の前につかつかと進んで、帽子をとつたりして得意がるのであつた。子供のいたづらと知つて、すまして通り過るのもあり、笑つて行くのもあるが、中にはおあいそに禮をかへすのも、又うつかり誘はれて本氣で手をこめかみに上る人もあつた。偉い大人が自分達の相手になつて呉た嬉しさと、偉い大人を相手にさせてやつたといふ力量をほこる心持が、ちやんぽんに心の中で躍つた。たつた一人、幾度繰返しても、うかとは手に乘らない苦手があつた。其の頃は少佐か中佐か、いくらよくても大佐だつたらうが、後の海軍大將伯爵山本權兵衞である。毎日馬車に乘つて、參謀の徽章を胸にかけて通つた。不思議に子供も名前を知つて居て、權兵衞が來た來たと口々にしめしあはせながら、先を爭つて帽子をとつて頭をさげた。しかし權兵衞さんは、頰髯に埋まつた青白い顏に、陰性の凄い眼を光らせて睨みつけるばかりで、微笑を浮べた事さへなかつた。

「權兵衞が種蒔きや鴉がほじくる……」

と子供達は口惜しがつて、馬車のうしろから追かけながら、はやし立てるのがおきまりだつた。

斯う書いて來て、話が甚だ横道にそれた事に氣が付いた。自分が玆に記さうとするのは、權兵衞さんの面影では無く、同く其の往來の出來事で、永く心に殘つて忘れられない白馬に乘つた人の事なのである。それを、子供の眼が、如何に實際在るよりも美しく見たかといふ例證のひとつにしたいのである。

夏の日の事である。門前で遊んで居ると、遠くから埃をあげて、まつしぐらに白馬をかけさせて來る人があつた。西洋の狩獵の繪に見るやうな黑い鳥打帽子をかぶり、霜降の乘馬服に足ごしらへもすつかり本式なのが、鞭は手綱と共に手に持て、心持前屈みの姿勢を崩さず、振向きもしずに通り過た。僅かに一瞬間の事であつたが、子供の眼には仰ぎ見る馬上の姿が、天かけるやうに聳えて高く見えたのである。

「いゝなあ。」

子供は一齊に感心して、見る見る町角に消えて行く白馬の行衞を見送つた。

「おいらも今にあんな馬に乘つかるんだ。」

一番頓狂な乾物屋の子は、ありあはせの竹の棒にまたがつて、其處いら中をかけずり廻つた。

「馬鹿、てめえみたいな鼻つたらしが馬になんか乘れるもんかい。あの人なんて百圓の月給取なんだぞ。」

年かさの車屋の子は、はしやぎ切つて汗を流して居る奴を叱りつけた。

「百圓？おつかねえ、おつかねえ。」

乾物屋の子は目をまあるくして、おどけた顏を突出した。

「百圓の月給だつさ。」

周圍の者も口々に驚嘆の聲を發した。驚く外に何等の考も浮ばない程、當時の子供の頭には、百圓と云ふ金が大金だつた。口でこそ百圓と一口にいふけれど、其の分量も値うちも、到底想像出來なかつた。

その連中にまじつて、自分は聲こそ出さなかつたが、心密かに驚嘆して居た。自分も大きくなつたら、あんな立派な馬に乘り度いが、百圓の月給取にならなければ駄目かと思ふとがつかりした。いつたい世の中に、どういふ人が百圓なんていふ莫大も無い月給をとるのだらう、大將かしら、大臣かしら、いろいろ考へたがわからなかつた。話に聞けば自分の父も、自分が生れない先に役人をして居た頃は、馬に乘つて役所へ通つたさうだが、どうも百圓の月給取ではなさゝうに思はれる。しかし、萬一父が百圓の月給取だつたら、どんなに嬉しい事だらうと、その事ばかり考へて居た。

夕方になつて、

「蛙が鳴いたからかへろ。」

と吾勝にいひながら、お腹を空かしてうちに歸つたが、自分は直ぐに母の所へ飛んで行つて、父の月給がいくらであるかを訊いた。

「何故そんな事を訊くのです。」

「何故でもないけれど、百圓？」

母は默つて自分の顏を見てゐたが、

「そんな事を訊くものではありません。」

と云つたばかりで取合はなかつた。金錢の事を口にするのは卑しい事だと、おちぶれ士族の娘である母は確く信じて居て、平生から子供達にいひきかせてあつた。

それつきり自分は口をつぐんでしまつたが、たつた一瞬間にして通り過ぎた丈の白馬鞍上の紳士の姿は、一生涯忘れない程爽かに眼に殘つた。どうかして、自分も大人になつたら、偉い人になつて百圓の月給取にならうと、恰も天下を望むやうな

大きな事として考へてゐた。百圓の金高は、廣大無邊に思はれたのである。

或時母方の叔父が來て、自分は其の膝の間で遊んで居たが、ふと思ひ出して訊いて見た。

「叔父さんはうちのお父さんの月給いくらだか知つてる？」

叔父は不思議さうな顏をして見下して居たが、目尻に微笑が浮んだので、自分は安心して重ねて訊いた。

「百圓よりも多い？少ない？。」

「多いとも、倍も三倍も多いだらう。」

自分は嬉しさに顏が紅くなる位だつはが、あまり無雜作に、且つ意外な返事だつたので、半信半疑だつた。

「それぢゃ叔父さんは？」

「叔父さんか。叔父さんは百圓の半分の又半分位かな。」

さう云つて太い聲で笑つた。

父の月給が百圓より多いらしく思はれて來た事は、やがて自分も白い馬に乘る事が出來さうな氣持を起させた。嬉しくて堪らなかつた。さうして、さういふいゝ返事をして呉れた叔父が、矢張り偉い人に思はれた。叔父さんの月給が、百圓の半分の又半分なんていふのは嘘に違ひ無い。嘘だからこそ後で笑つたのだと思つた。

その馬上の紳士の姿は二度と見た事が無いが、それから三十年たつて、自分は百圓の月給取になつた。その時自分は馬に乘るどころでなく、一家を構へる力も無く、下宿屋の二階にくすぶつて、常に懷中の乏しさに難澁し、朝夕滿員の電車に鰯の鑵詰の姿をして乘らねばならぬ身の上だつた。勿論物價の驚くべき騰貴と、貨幣の購賣力の變化は計算外に置く事は出來ないが、しかし子供の時に考へた百圓は、今日の壹萬圓よりも拾萬圓よりも百萬圓よりも莫大なものであつた。

上に引合に出した叔父についても、英雄崇拜の思ひ出がある。叔父は慶應義塾を

出て、郵船會社に勤めて居た。海上勤務の頃は、事務長をしてゐたのか、或はその下役の事務員かは知らないが、歐洲航路の船に乘つて、屢々珍しいお土産を持つて來て呉れた。六尺近い大男で、日本人には類の無い白皙の面に、稍赤味を帶びた口髭をはやして居た。それが金筋の入つた正服を着て、當時はまだ珍しかつたバナナだのパイン・アップルだのの籠を提げて歸つて來る姿は、自分の異國趣味を充分滿足させた。文明開化といふ言葉が流行し、何品でも質のいゝ物は上等舶來と唱へた時代だから、西洋といへば何よりも美しい國に想はれた。自分は叔父にせびつては、歐羅巴の港々の話を聽かして貰つた。

しかし叔父を崇拜するのは、單にそればかりでは無かつた。それよりも、叔父の投る小石が子供の眼には判然と距離のはかれない程遠く迄飛んで行く事に敬服して居たのだ。

叔父の家は木挽町の田川といふ待合の隣にあつた。二階一室に階下が三室位の小家で、自分から見れば祖母に當る母親と、自分から見れば矢張り叔父でまだ高等小學校に通ふ位の年配だつたから豆叔父さんと呼んで居た叔父の弟と、台所を働く婆やとで暮らしてゐた。涙脆く、金錢にしまりの無い、お調子に乘り易い性質を多分にうけついだ自分は、まぎれも無く母方の血を引いてゐるので、子供の時から此の祖母の御贔負だつた。悧巧な兄は父方の祖母のほめ者だつたが、母方の祖母は自分をつかまへて、お前は兄さんよりも屹度偉くなるよと、無責任な事を云つて可愛がつて呉れた。時々そのお祖母さんの寢顏が狸に見えて、夜中に泣き出す事もあつたけれど、年中泊りがけで遊びに行つてゐた。二階の椽側に置いてある籐椅子の上に足を投出して、目の前の川を漕下る端艇を見るのが樂みだつた。夕方叔父が會社から歸つて來る頃は、祖母に手を引かれて河岸に出て待て居た。大男の叔父の姿が見えると、自分は祖母の手を振切つて、半町ばかり先の或金持のお妾の家の門前迄かけて行つて、叔父の手に縋りつくのであつた。

此の甥を喜ばせる爲めに、叔父は小石を拾つて川水の上に遠く投て見せた。眞似をして投る豆叔父さんの石は川の眞中位で水に落ち、更にその眞似をする自分のは足下の淺瀨に水音を立てるのであつたが、叔父のは向ふの海軍大學の石垣にぶつかるのであつた。その向岸は幼い者には非道く遠方に見えた。早く叔父さんのやうに大きくなりたいなあと、つくづく感じたものであつた。川を越えて石を投げ得る人は、あらゆる事の勇者であるやうな氣がしたのである。

叔父は其後友人の爲めに連帶債務をしよつて東京にはゐられなくなり、各地を流轉したあげくに、殆んど誰も知らないやうな狀態で、北海道で死んでしまつた。

つい近頃往年の木挽町の河岸をぶらついた事があつた。聖人ぶつて得意になり、平民がつた自慢をしながら、死ぬ間際には爵位を貰つて大往生を遂げた心卑しき金持の妾宅はなくなつたが、田川は愈々商賣繁昌らしく、向岸の海軍大學の景色も昔通りだつた。だが甚しく意外に思つたのは、川幅の至つて狹い事だつた。子供の時に見た大人の偉さと同じく、大人になつて見ると大したものではなかつたのである。

祖母も叔父も豆叔父も今は世になき人であるが、叔父の住んでゐた家は以前のまゝに殘つてゐて、知らない人の表札がかゝつて居た。低徊去るに忍びない心持もあつたが、幸い附近の人影も見えないので、足下の小石を拾つて向岸迄投て見た。別段力を入れないでも、無雜作に石垣に屆くばかりでなく、樹木の繁つた校庭にも樂々と投込む事が出來た。二つ三つ投げ、最後のひとつをもう一度石垣に叩きつけた時、

「誰だッ。」

と校庭から怒鳴つて、灌木のしげみを押分て顏を出した人があつた。自分ははしたない所爲を耻て一散に逃出した。

遂に自分も大人になつた。しかし、あれ程迄に崇拜した大人が、いかに馬鹿々々しいものであるかを夙に知つてしまつた。あらゆるものに驚嘆し、すべてほんとに

在る物よりも、大きく、立派に美しく見る子供の眼を失つた事を悲しみ、永い間その子供の頃の回顧以外に、心から自分を喜ばせる事が無かつた位落膽した。

言葉を換ていへば、盲目的な憧憬の甘美に醉つた自分をなつかしみ、實際の世の中の美しくない事に悲觀し、著しく懷疑的になつたのであつた。

ところが最近になつて、自分には更に新しい眼が開かれて來た。それは完全に發達した大人の眼である。徒らに物事に驚かず、よきものと惡き物の區別を知り、あらゆる物の價値を正當に批判し、しかも尙熱情をもつてよき物を喜ぶ大人の眼が、無批判の憧憬讃美を事としてゐた單純極まる子供の眼に勝る喜びを持つ事を悟つて來た。

それは物の本體を見極める眼である。價値批判の眼である。單に生々しい色彩に眩惑されるのではなく、光と共に陰影を見る眼である。單に事物の分量に驚くのではなく、その質を吟味する眼である。子供の眼が夢を見る眼ならば、これは實在を見る眼である。それが幻影を見る眼ならば、これは現實を見る眼である。深く、鋭く、冷靜に、世態人情の一切に迄視線の及ぶ眼である。

確かに線香花火のやうに容易に熱し、忽ち火花を散らす感激はなくなつたが、同時に又贋物にのぼせ上り、くわせ物にだまされる事のなくなつたのが、大人の眼の効果である。凡て今日の世の中の如く、不正直なる自己宣傳の流行する時、その聲の大なる事に驚いて、批判の心を忘れる傾向のあるのは否み難い。

たとへば普通選擧を叫ぶ政治家の多くが、必ずしも眞に普通選擧の實施を希望してゐるのでは無く、單に反對黨を苦しめる爲めの手段であるとしても、その聲の大なる時、人は何等の疑を起さない。プロレタリアの藝術を說く者の中にも、必ずしもプロレタリアの藝術とかいふものに信仰を持つ者ばかりでなく、中にはどうにかして文壇の地步を占め度いが、さりとて順當に勉强してもとても見込が無いから、變つた旗印でしかも存外現在の人氣にかなひさうな此派に屬して、新聞の文藝欄を

賑はしてゐる者があるであらうが、そのがむしやらの暴言に釣込まれて、これこそ新時代の藝術であると悅喜するものが無くもない。新聞一面をつぶして忠義孝行を說く有田ドラッグは、矢張り梅毒淋病の藥を賣廣めるのが目的で、忠孝はその馬鹿々々しく且つ巧妙なる手段であると氣のつかない人も澤山ある。

これらは皆永久に子供の眼を持ち、遂に大人の眼の開かれぬ人々ではないだらうか。宜なるかな、在野黨は常に憲政の神樣と思はれ、原稿の押賣をする者は新進作家と思はれ、有田ドラッグは國民道德の師表と思はれるのである。近頃の言葉でいへば、宣傳の力に壓倒されて目のくらんだ狀態である。本體を見極める大人の眼を持つてゐないのである。例を手近なところにとれば、作品の眞の價値如何に拘らず、改造社新潮社越山堂の大がかりな廣告に引かれて、下らない小說や誤譯だらけの飜譯に殺倒するたぐひである。往年德富蘆花の「不如歸」は、上流家庭の秘事に材料をとつて安價なる女學生の涙をしぼつたが、今日かへりみて其の作者、その作品が明治の文壇に與へた影響と價値を考へて見ると、殆んど何も無いと云つて差支へない。近年「死線を越えて」の作者賀川某は、貧民の友達として一身をさゝげ盡す熱情愛すべき人ださうである。しかし其の人の藝術の作品は蕪雜冗長衒氣稚氣滿々たるもので、失笑を禁じ得ざるものである。しかも勿驚數百版を重ぬる所以は、その題材が南瓜、燒芋、紅、白粉の如く女好きのするものだからには違ひないが、大部分の力は、萬事今日を目安に置く商賣主義の雜誌社の大廣告に釣られる無批判人の罪と云はなければならない。此の類の事は擧て數ふるいとまなく、今日作家の名聲は雜誌社によつて作られ、眞の批評家によつては形成されぬ事實がある。

いゝ年をして子供の眼を持つ人間は、其人間自身にとつては幸か不幸かしらないが、少なくともよりよき世の中へ進む爲めには、斯かる存在はわざはひである。

自分はおもふ、今日の世の中に何が一番はびこり過ぎてゐるかと云へば、女と子供を相手にする新聞雜誌と、子供の眼しか持たない人間である。大人は早く目覺め

なければならない。物事の本體を見極め、價値判斷を明確になし得る大人の眼を持たなければ、此の國は救たれない。（大正十二年六月四日）

「含羞」の作者

「含羞」（がんしう）は小島政二郎（せいじらう）氏の處女作集である。「オオソグラフィイ」と題する一文によつて名を知られてから、既に六七年を經過して、始て第一集を公にするに至つたのは、近頃の事にしては極めて珍しい。二つか三つ小說を發表すると、忽ち新進作家とそやされて、商賣上手の本屋から出る叢書の一冊に組入れられ、いゝ氣になつて納まつて居るうちに、勉强心は失ひ盡し、何等の進步成長も無く、何時の間にか頭腦も心も腐つて、やがて存在を忘れられてしまふ例が多いのに、これは餘りに遲過る感がある。作者が自重して居た爲めであらうか、作品が左程勝れてゐない爲めであらうか、それも確かにあるには違ひ無いが、それよりも、作者に人氣の無い事が第一の理由らしい。

評者が小島氏の名前を知り、同時に書いたものを始めて讀んだのは、大正五年十

一月發行の「三田文學」に出た、前掲「オオソグラフィイ」である。鷗外漱石荷風藤村花袋秋聲白鳥其他當代の大家を例にとつて、現代の作家の誤字、當字、假名ちがひを指摘したもので、多少の憤慨と、幾分の揶揄嘲笑と、更に些少ながら得意さうな調子を含んだ文章であつた。誤字當字假名ちがひを、年が年中やつて居て、正に內心不愉快に思ひながら、今更勉强して直さうとする心懸も無い自分の如きは、此の正字法を讀んだ時、うるさいぢゞいが出て來たなと、ひそかに眉をひそめた一人である。ひまな隱居が文學者をいやがらせて、得意になつて居るのだらうと想像して居た。ところが、それが未だ若い學生だと聞知つた時は、甚だ意外に思つた。果して眞面目ならば、近來稀なる篤志家である。からかつて得意になつて居るのなら、此の上も無く氣障な奴である。自分はさう云ふ氣持を起した。

然るに其の次の號の同じ雜誌を見ると、「森先生の手紙」といふ題で、前號に於て假名づかひの誤謬を指摘した鷗外先生から「教示を煩し度」云々といふ頗る眞面目な手紙を貰つて、恐縮し又感激した事を書いて居る。意外な手ごたへと、相手が一代の碩學なので、自分の所論が正しいか如何かを考へるよりも先に、まづ恐縮した樣子が、ありありとうかゞはれた。「かへすがへすも身の程知らぬ御無禮申上候事空恐しく重々お詫び仕候」といふのが、決して形式的な禮儀の言葉では無く、其の時の小島氏の心持を、ほんとに正直にあらはして居るやうである。

「森先生の手紙」を讀んだ時、これは存外感心な人かもしれないぞと、自分は思ひ直した。彼は其の文章の中で、森先生の手紙に接し、一層正字法に身を委ね度いと、十分熱のある言葉で繰返して居る。恐らくは鷗外先生の手紙は、彼の勉强心を刺戟した事尠くなかつたのであらう。

此のいきさつは、自分の見る小島氏を最もよく物語るものである。彼には多分の茶目氣分もあり、おつちよこちよいの所もないとは云へないが、同時に又純なる感激と、熱心な研究心を以て事に當らうとするいゝ精神もある。その後の氏の文人と

しての爲る事の上にも、此の點は明かに現はれて居る。面倒臭い正字法に熱心になり得るのと同じ精神で、糞眞面目にねつい研究もするかと思ふと、時々は雜兵葉武者と身をおとして、下らない機智を振廻して喜ぶ事もある。いゝ半面と惡い半面を持つてゐて、惜むらくは兩者がまるつきり別々に、勝手氣儘に活躍する場合が多いのである。どちらの途にもおいそれと方向を轉じ、どつちに行つても相當の喝采を博しさうな危險性を帶びて居て、根强い持續性を缺いてゐる。おもふに、將來此の作者が深く廣く大きい藝術境を開拓して行く爲めには、當分の間、かなりの辛抱と、手痛い刺戟が必要らしい。さうでないと、徒らに仕出しに使はれる憂がある。捕吏の役をうけたまはつて、身輕にとんぼを切らないとも限らないのである。

小島氏は東京下谷に幾代か續いた商家に生れたのださうである。その土地のさういふ家のあらゆる傳統が、生れない前からの魂に宿つてゐる。生れてから、主として學校で受けた教育と、自身志して勵んだ學問とは、氏の生れない前から持つてゐるものとはまるつきり反對の方向にむかつて居るらしい。渾然として融合されて居ないやうである。此の點に於て、同じ下町の作者でも、お隣の淺草の詩人久保田万太郎氏とは全く趣を異にしてゐる。

久保田氏は、生れない前から魂に宿つてゐる傳統を愈々はぐくみ、自分自身の氣分に執着し、その氣分に少しでもそぐはないものには、一切目をつぶつてしまつて、柄にない事には手を出さない。其處に獨特の藝術境を展開するが、一面から見れば、描かれる世界は極めて狹いのである。たまたま埒外に出ようとした事も無くは無かつたが、忽ち失敗した。聰明なる作者は、爾來自分の持味に對して、全く貞節を盡す人になつた。言葉を換へて言へば、破綻を招くおそれの無い道を固守して居るともいへる。夙に完成した作家として推稱される所以である。

然るに小島氏は、生れたる環境に昵み、其處に安住の地を見出す事の出來ない人である。寧ろ自分の持つて居ない物に憧れる傾向を帶びて居る。從而、絶間の無い

不安動搖焦燥が、弱い心を苦しめて居るに違ひ無い。これを乘切らなければ、進歩の道は開かれないのである。

自分の生れたる環境に眤んでゐられない人の眼は、常に自分以外の世の中に向けられる筈である。小島氏にとつては、何よりも先に、未だ知らざる事を學び知る事が興味であるらしい。知識が第一のものであつた。

知識慾の强い事、それは正字法に興味を持つ事にもあらはれて居る。從て氏の作風は、描かれる世界の情趣に溺れるのでは無く、描かれる世界を物語るのである。常に讀者の存在を忘れないで、如何にすれば話の筋が、最も明白に傳へられるかを氣にしてゐる。氏自身は立派な描寫を試みてゐる積りでも、說明に傾き度がる結果になる。

僞善か、僞惡か、何れにしても自分の事を題材にして、肯定したり否定したりする事の好きな現代には珍しく、小島氏には自傳風の作品が殆んど無い。此の知識慾の强い作家には、よく承知してゐる自分自身の事などは、左程興味が無いのであらう。斯ういふ傾向は、鷗外先生にも芥川龍之介氏にも見る事が出來る。

自分以外の未知の世界に興味をあさる當然の結果として、小島氏の作風は客觀的である。殊に初期の作品は、全然作者の批判を挿はさまない寫生文の脈を引いてゐる。氏の書いた物を見ると、子規虛子節三重吉など「ホトトギス」の連中又はその連中の親類のやうな連中に敬服して居た時代の、かなり長かつた事は明白であるし、處女作「睨み合」には、寫生文を手本にした厭味が多分にある。

「睨み合」は、流石に幼稚なところは免れないが、氏の作中勝れた物の一つである。稍型に入り過ぎた感はあるけれど、隨分澤山の人間が手堅く描き分けられて居る。就中加藤屋といふ店の娘がいゝ。喧嘩する二人の女房の、條理の立たないひ分なども、小商人の軒を並べる下町に特有の地方色が出てゐて面白い。若し久保田氏ならば、その地方色に終始し、その情趣に溺れんとして危く踏止まるところ迄入つて

行くであらうが、小島氏は全然離れて書いて居る。向河岸の火事を、無責任に見てゐる態度である。そのかはり、此の小說に描かれた町内一體に作者の觀察は行きわたり、たゞ些か智的に滑稽化した。

觀察――詳くいへば、作者の心を少しも動かす事なき觀察は、最初小島氏のとつた態度である。主情派の作者に見るが如き、作品全體の布置結構を考へる暇も無く、先づほとばしり出る情熱を、片端から文字にして行くと云ふやうな態度は、年少にして筆を執つた人にも似ず、最初から持合せて居なかつた。評者は自分自身のむかしと想ひ比べて、斯う迄違ふものかと驚くばかりである。どつちがいゝか、一口には云へない事だけれど、あんまり若い時分から危氣の無さ過るのも美しくないと思ふ。小島氏の作品に若い讀者を引つける所が無く、從て人氣の無いのも此の故であらう。

いづれにしても、觀察の行屆いた「睨み合」は冗漫とたどたどしさの目立つにも拘らず、よく描き、よく纒めた作品として推稱し度い。

「法隆寺のかへり」になると、文體の上では、かなり寫生文脈を振捨て、當代の小說の型にはまつて來てゐる。しかし觀察の問題になると、矢張り寫生の域を脫し無い。或は此の人生に對する作者の態度が、寫生的だといふ可きであらうか。

奈良へ行つた「わたし」が、法隆寺のかへりの汽車の中で、人も無げな小生意氣な中學生と乘合せ、不愉快なおもひをさせられて腹を立てゝゐるうちに、その憎らしい中學生は、車から落ちて轢殺されるといふ事件である。とつてつけたやうな「わたし」の哲學をどければ、上手に出來た短篇である。しかし、生意氣に車內を飛廻る中學生に對し、又死體となつた中學生に對し、「わたし」は立腹したり、苛々したり、憎んだり、腹癒せをしたやうな氣持になつたりして居るが、意外な珍事の突發した際にも、決して吾を忘れはしない「わたし」が主になつて、附近の光景が從になる事は無く、あく迄も「わたし」は觀察者であり、寫生家である。

凡大體論として、藝術家は燃ゆるが如き熱情を、持てば持つ程結構であるが、同時にその作品には、或點迄の客觀化が大切である。同じく客觀描寫を事とする作家の中にも、大略二種の型が想像される。甲は、熱し易い自分自身を無理に抑へて置かなければ、自己の感激に作品全體を押流されてしまふ傾向を持ち、乙は最初から冷靜に、別段の無理も無く、おのれが顏を出さずに、見る儘に描き得る人である。小島氏が第二の型に屬する事はいふ迄も無く、あく迄も氏は見て描く人なのである。其處に此の作者の特徴があると同時に、作品の底力の無い短所がある。何處迄も寫生の域を脫し切れない齒がゆさがある。

もう一つ例を擧れば、明治大正の文學を見ても、自然主義勃興以前の作品と、以後の作品とを比べると、各々の主義傾向の如何に拘らず、前者に比して後者が、此の人生を深く鋭く細かく觀察してゐる事は爭ふ餘地がない。それと同じく、一個人の場合にも、或る關門を通過して來る事が必要である。最初からちいさく冷かに固まつてゐるのは好ましい事で無い。小島氏の作品に熱情の無い事が、永年評者のあき足らず思ふ所であつた。

記憶のよくない評者は、只今その典據を擧げる事は出來ないが、曾て小島氏が「どんな事でも內容などは構はない。たゞそれがよく描けて居ればいゝのだ」といふ程つきつめた言葉を發表した事があつたと思ふ。それがほんたうの信念であるか或は一時性の感激から出たものか、多少の疑はあるけれど、兎に角或る時代の小島氏は、さういふ考を持つてゐたやうである。餘り分析をせず、漠然と、極めて通俗に、藝術の要素を內容と形式とに區別すると假定して、此の作者は明白に形式を重しとし、內容を輕んじた。

果して、內容なんか何でも構はない、よく描けてゐればいゝであらうか。否々、よき內容とよき表現とが結びつかないでよき藝術が生れる筈はない。此の誤れる考をいだいてゐた間の小島氏の作品に見る可きものゝ極めて少ないのは當然である。

知識慾の強い、感じるよりも知る事の好きな、内容よりも形式を重んじ、オオソグラフィイにこだはり、寫生文畑に育つた觀察者こそ、第一期の小島氏で、此の時期に出た十數篇の小説は、何れもその果實である。

「一枚繪」は相當苦心したらしく、或は所謂自信の持てる作品かもしれないが、かなり熱心に繰返してゐる説明的描寫も、效果はちつともあがつてゐない。殊に此の作にあらはれる艶めかしい筈の場面が、些かたりとも艶かしくない。儒者に好色本の講釋をさせてゐるやうな窮屈を感じる。又此の一篇の骨子ともいふ可き、人間の心の奥底に潜んで居る「不思議な力」それによつて主人公徳さんは、一時は此の世の中の迷子になりかけてゐたのが、ほんとの徳さんにかへるのであるが、讀者が其の力を感じて領くには餘りに弱い。恐らくは作者は描く事に急にして、此の大切な力を痛感しなかつたのであらう。結局上つらの筋を賣るお話以上に出なかつた。

お話といへば、講釋種の「森の石松」でも、同じく石松の心に起る「或る力」について「もう身を全うする氣は毛頭なかつた。いや、毛頭なかつたといふよりも、彼には分らない或心持が、彼をこゝにぢつと隱れ通す事をさせなかつた。彼の敵の前へ無理にも押し出させるやうな或力が彼のうちに潜んでゐた。」と説明してゐる。しかし其の「或力」は、作者の説明解釋としてはうけとれても、主人公石松自身の心の中に起つた力であるとは感じられない。作者の技倆の問題かも知れないが、一面から見れば、之を説明するばかりに骨を折つて、先づ痛感した後の説明でない爲めに、人を感動させる力を缺いたのであらう。

小島氏が表現を重んじ、描寫を尊ぶ事は上にも述べた。しかし、人は必ずしもその志す事を得意とはしない。作者は「森の石松」を、新講談並には考へて居ないに違ひない。少くとも、「よく描けばそれでいゝのだ」といふ意味で、描寫に價値を置いたに違ひない。だが、その描寫は、色彩に乏しく、力が弱い。殊に此種の作品には是非とも欲い新味が無い。形容詞さへ古めかしいものばかりである。

「萬引」も話の筋はよくあるやつで、これを藝術として活かすには、描寫の力にまつ外はない。少なくとも、人間の助平根性を利用して、赤い蹴出の下の白脛を見せ、目尻の下つた隙に乘じて仕事をする手段を、昔のむかし考へ出し、且實行した開祖は非凡である。又その話を當時始めて聞いた人々は、くすぐつたい面白みを感じたのであらうが、今日となつては既に話が古過る。誰しもきゝあきてしまつた。それなのに、小島氏の如き話好きが、今更こんなねたを持出したのは、ひとつの不思議と云つてもいゝ。多分これも、話なんか何んでもいゝ、うまく描けばいゝのだといふ議論から出立したものであらう。

其處で問題は再び描寫の出來榮になるのだが、不幸にして此の作も、如何にして萬引が行はれたかといふ型の説明以上に出なかつた。裾が開けて、長襦絆がちらちらして、やがて眞白な肉體が見える。その景色は誰にでも容易に想像出來るし、又誰にでも樂に描けさうである。さうして小島氏も誰にも出來る事を誰にでもやれさうな程度で描いた丈である。最も肝心な中番頭の姿は極めて影が薄く、又更に肝心な官能描寫は、あんまりありふれて居て利目がなかつた。

曾て小島氏は「官能描寫の才」と題する隨筆で、川柳子の手腕に敬服し、川柳の生命を説いて、「品のないところ、異端的なところ、インモオラルなところ」「はじめから品位を捨てゝかゝつてゐればこそ、遠慮勝な俳句では一指をも染めることを許されない特殊の世界へ、フランクな觀察の眼を向け、思ひも寄らない多面的なユニイクな世界を展開し得るのだ」としたが氏の作「萬引」の官能描寫に於ては、あまり品がよく、あまりにモオラリスティックで、又遠慮勝で且思ひ當る事ばかりを展開した。色氣の無い事と、堅苦しい事は、敢て此の一篇のみならず、その爲めにも氏には人氣がないのであらう。

話好きの一面を見せて、世の中には斯ういふ話もあるとか、又は或話をきいて面白がつた作者の心持のうかゞはれるものには、「大風の夜」「車掌」「醉つぱらひと

犬の舌」などがある。いづれも其の話の持味が出てゐない。「大風の夜」の話をする酒のみの畫家の風格も、物凄い嵐の夜の光景も、あまりに雜報並である。「車掌」といふものは斯ういふ毎日を送つてゐるのだといふあら筋丈は飲込めるが、其處に當然なくてはならない話手卽ち車掌の人となりも、その車掌の生活してゐる人生の退屈も、作品の中に根を張つて居ない。「醉つぱらひと犬の舌」にしても、犬になめられた醉つぱらひが「俺は蒟蒻は嫌ひだよ」と云つたといふ話丈の興味で、「自己に强く執してゐる此の醉どれの姿」などゝ、香のぬけた七色唐辛のやうな哲學をとつてつけたのなどは、全然話の持味を知らない遣口である。

前にも述べた通り、小島氏には、生れながらに東京の下町の傳統でみがゝれた肌合がある。機智に富み、警句に長じて居るのも都の人の特質である。しかし其の作品には、つとめて是等の長所と見れば見れるものを、かくさうとし、避けようと努力してゐる。小才を振廻すのは、藝術上大の禁物だと考へてゐるらしい。日常會話に於ては、隨分辛辣な口もきゝ、冷嘲熱罵もほとばしり出るが、藝事にかけては野暮堅く、寧ろ融通の利かない方である。尤も氏の活動の範圍は廣く、小說隨筆批評飜譯は勿論、歌も句もつくり、又小料理の庖丁さへ呀えてゐるさうであるが、最も力を盡す小說の創作に於ては、眞面目過て手も足も出ない形である。

少しく根本に遡れば、評者は「藝術は人にある」と確信し、よき作品をうむ爲めには、先づ自分といふ人間を磨きあげなければならない。作者卽作品となつて始めて藝術家は完成されるのだと考へて居る。自分以外の何處に自分の藝術があるものか。

ところが小島氏には、藝術は自分の外にあつて、これをつかむ爲めに努力し勉强しなければならないのだと思はれたらしい。それと云ふのも都の人の謙遜な心から、藝術を尊しとし、おのれを卑しとする結果、その至高の藝術に向つて精進はするけれど、そんなに尊い藝術が自分自身のうちに在るとは考へられないのである。

がむしやらに名告をあげ、自分で天才だと宣言するやうな田舍者の强味を持つてゐないのである。

それかあらぬか小島氏には、藝術家らしい心持の動く事は感じられるが、全身を擧て藝術家だといふ感じが無い。頭の先から足の尖迄藝術家だといふ感じが無い。換言すれば人としての力が甚しく不足なのだ。性格の强味が無い。それが其の作品にあらはれて、あらゆる點に於て力の弱い、色彩に乏しい遺憾が絡みついて來るのである。

扨て此の手も足も出ない迄堅くなり過た作家は、處女作を發表してから數年ならずして、次第に行詰つて來た事を、自分自分でも知つたらしい。其間比較的に樂な氣持で書いたらしい「うらおもて」の如き作品もあるが、これにも矢張り、ひとつ面白い話をきかせようと云ふやうな態度が面白くない。折角世の中のうらおもてに皮肉な觀察を向けながら、眞心から僞りを憎む心持ではなく、面白がつていひつけ口をしてゐる樣子である。

それに比べると、講釋師の大立物を主人公にして、實在の人の名前をその儘に用ゐた「世話物」には、もつと大きい社會批評が含まれてゐる。人の世の出來事の說明者として、話手としての小島氏の傾向は、此の作では行く處迄行つた氣がする。氏が始から追及して來た說明的描寫法は、その長所と短所とを、作中に明瞭に示して居る。段取が都合よくつき過ぎてゐる程とんとんたゝみかけて筋を運ぶ技倆は、氏の作中「世話物」を以て第一とする。講釋師の心の中も、なる程かうもあらうかと領かれるが、同時に又、何といふ堅苦しい、色氣も情合も無い手法であらう。恰もそれは、年號の正確のみを主として時の社會相を無視した歷史讀本の如きものである。恰もそれは、人口と土地の面積のみを主として、氣候風土人情を度外視した地理書の如きものである。氏の作中有數の物で、評者も堅苦しい說明的描寫を極度迄運んだ特殊の味を認める事は認めるが、同時に小島氏の作風は遂に二進三進も行か

ない處迄行詰つた事を說明するものと見る可きであらう。

小島氏は、他の多くの初心者とは違つて、最初からスタイルを第一に考へたらしい。多數の者は、先づ第一の作品の筆を執る時には、無闇に書き度て堪らず、其の樣式を如何するか見當もつかないで、只管おもひ浮ぶがまゝに書きつけて行く。必ず陷る冗漫の弊さへ、他人に指摘されるか、或は時を經て漸く自得する位なものである。評者の如きも、此の部類に屬する事を自分で認めて居る。

又他の多くの初心者は、自分々々の柄も考へずに、徹頭徹尾先輩の模倣をする。二者何れも、自分自身の認めのつくスタルを持つてゐない事になる。

それで、素質のいゝ勉强心のある者は、時を經、年を經て、修業努力の結果、次第々々に自分自身の樣式を發見し、自得して行くのであるが、小島氏は稍選を異にしてゐる。氏は最初から現代小說の各樣式を一通りは承知し、冷靜に比較したあげく、自ら信ずる物を用ゐた。上來屢々いふ如く智的說明に據る描法で、語格の正しき事を尊び、文字は簡單明確なる事を專一とした。自分ではデスクリプティブであると信じてゐたが、實はナレエティブな書方である。

氏は此の形式には久しい間疑を抱かなかつたらしい。「內容なんか何でも構はない。よく描けばいゝのだ。」といふ言葉も、此の確信の一端をもらしたものであらう。

乍然その作品の效果については、物のわかりのいゝ人に似氣なく、最近迄自省が足りなかつたらしい。あまりに形式の正しさをのみ念じて、その味ひを忘れてゐたのである。書き度いが先に立つのでは無く、自分の形式にもとらない事ばかり考へ、結局のんびりとしたところが無く、ちいつぽけなものになつて了つた。氣魄人に迫る趣を全然缺いてゐた。餘情とか餘韻とかいふものは、まるつきりない。書かれた文字が一千字ならば、一千字丈の意味と效果しかない。その文字に伴ふバックが無い。抑へても抑へても漲りあふれる感激が無い。作者其人の風格が無い。

作品の中に作者の姿をあからさまにあらはす事は、或場合には避く可きである。

しかし、一字一句にも陰影の伴ふ事は必要である。其處に作者の氣稟がある。作者の呼吸がかゝつてゐるのだ。

小島氏にはさう云ふ缺點があつた。師範學校の優等生の如く、模範兵の如く、その形は一見整へるやうに見えて、その心の貧しさを忘れんとしたのである。氏は自ら志す所に熱心のあまり、わけもなく係蹄に落ちてしまつた。あんまり早く大人にならうとして、本來生長して止まない若者の心を失はんとしたのである。

くどいやうだが「よく描けばいゝ」のではない。「よき內容をよく描かなくてはいけない」のである。文字使の正しい事が第一ではない。その文字の與へる效果が第一である。殊に自分自身は涼しい顏をして、お話をする態度の寫生主義では、動いて止まない人生は描けない。お話の世界に假定される靜止的な場面しか浮ばない。こしらへ物の感じを振捨てる事が出來ない。多面的でなく、一面的だから、作品に彫刻的なところが無い。內から湧起る韻律がないから音樂的でない。平面の寫生だから色彩と陰影に乏しくて繪畫的で無い。熱が無く、血が無く、聲が無く、情が無い。むかしからいひ古されてゐて、しかも何時迄も命のある藝術批評の寶語を用ゐれば、氣稟が無いのである。これなくして、何時の世に勝れたる藝術があつたか。

小島氏自身も、隨筆「あつめ汁」のひとつ「泉鏡花の新講談」の中で、泉鏡花先生の「湯女の魂」と改造社企つる所の社會主義者等の新講談とを比較し、「あの「湯女の魂」は口演が生んだ代物で、しかも立派に藝術品になり得て居る。それに引かへて、「改造」に載つてゐる新講談は、元の講釋にさへ遠く及ばない」「氣稟々々、しみじみ氣稟の尊さを感じた」と云つてゐる。

評者は前に小島氏は行詰つたと云つた。行詰つた小島氏は愈々寡作になつた。若し周圍に彼を勵ますいゝ友達が無かつたならば、心弱く筆を捨てはしまいかと、あやぶまれる程寡作になつた。しかし、本文の冒頭に一言した通り、一面には極めてねつい所のある人だから、他の一面の下町子の弱蟲を鞭韃しながら、如何にすれば

新しい道が開けるか、隨分長い間苦しんで居たらしい。

苦しんでゐたらしいと云ふよりも、今尙苦しんで居るらしいのである。さしたる破綻も無いかはりに、何の魅力もなく、極めて上つらばかりの、いはゞちいさく纏つた作風を捨てゝ、あらためて新しい第一歩を踏出さなくてはならない。その冒險を試みなければならない。恰も手馴た手工業を捨てゝ、近世の大仕掛な機械工業に轉じなければならなくなつた工人の身の上にも似て居る。

卽ち積極的に新しい作風を確立する迄に、折角自分のものにした過去の勉强の果實を、踏みつぶす必要がある。その苦艱の時代に、現在此の作者は骨を削つてゐるのである。

恐らくは小島氏の最後の到達點は遙かの遠くにあるのであらう。氏の今後の作風が何處迄變化し、如何いふ處に落つくかは、勿論評者には豫斷出來ない。小島氏自身にもわからないであらう。しかし、その努力の結果は、旣に着實に世の中に現れて來つゝある。大正十年の下半年以來、二月に一つ、三月に一つ、發表される作品がそれである。

それ等の作品には、以前には無かつたものが澤山含まれて來た。勿論小島氏は人氣取を專一とする作家ではないから、行詰つた苦しまぎれに、赤から綠に變るやうな、根柢のない變化は見せなかつた。昨日は享樂主義の詠嘆に耽り、今日は急ち階級藝術に血を湧かせて漫罵を事とするが如き態度には出なかつた。本來の面目たる觀察者としての自己に別るゝ事なく、客觀描寫の筆を捨てず、しかも極めて自然に、進歩の跡を明かにした。

先づ完全に寫生文脈から筆癖を解放し、物語の世界から實人生に轉じ、人間が從で話が主だつた昔と違つて、人間が主で話が從になり、靜止的な作風は際立つて動的に創造的に變り、人の姿形を描く事から其の心を汲む事に及び、その他數へれば數ふ可き事がすくなくない。要之、冷々たる觀察者としての作者に、對人生の情熱が

燃えて來たのである。その變化の原因が何であるかは知らない。幾代か續いた「家」を失つた事も、自ら選んだ妻を得た事も、都の人、殊に下町の商家の生れの人にとつては、大なる刺戟であつたであらう。讀書人としての生活から、おもてだつた世間へ踏出した形がある。氏の觀察する世の中は廣くなり、人生は深くなつた。少なくとも讀書人が、知識として持て居た世間を、より切實に體得した事を示すものである。二十代では味へない此の復雜な世の中が、氏の眼前に漸く展開されて來た。

作品に之が例をとれば、前に擧た「世話物」にも既に以前の諸作に比べて、遙かに深味を加へて來たが、大正十年七月の「三田文學」に出た「喉の筋肉」に至つて、作者は始めて完全に其の力量を示したのである。

主人公は給仕上りの若い會社員で、生れつきの吃音である。その爲めにあらゆるひけめが彼を苦める。それが會社の新年宴會で、生れて始めて酒を飲み、醉ふと吃らず口のきける事を發見した。吃らないと云ふ事は、卽ち常にひけめを感じていけてゐる心の釋放である。それ以來酒を飲み、飲めば泥醉する。遂に母親から、平生恩を受けて居る課長に賴んで意見して貰ふ事となつたが、酒はうまくて飲むのでなく、「喉の筋肉」のゆるむ嬉しさに醉ふのだときいて、課長も涙を感じ、意見をする役目なのに、手を叩いて若者の爲に酒を命じるといふ筋である。

筋であると云ふけれど、從來の小島氏が筋の說明者だつたのに比べて、此の一篇はいきいきと描かれて居る。あゝさういふお話かと、僅かに耳を傾けるばかりでは濟まない。先づ吃音の主人公の哀れな身の上にも心を動かされ、又さまざまの場面が、現實性を多量に帶びて居る。それよりもなほ悅ぶ可きは、曾て小島氏の作品に缺除して居た人間臭さが、始めてまざまざと感じられる事である。

小島氏の作品で、讀者の心に觸れ、その同情をそゝるものは此の作を以て嚆矢とする。結構の大きさも曾てない所であり、文章に力のある事も前例が無い。主人公平太郎は醉ふ事によつて、「かたくなゝ」喉の筋肉の自由になる事を知つた。小島

氏は先づ自分の情熱を以て人間に親む事によつて、かたくなゝマンネリズムから、彼自身の藝術を自由にした。

評者は永年の間此の作者の態度にも作品にもあき足らず、又近年の此の作者の煩悶と努力には他人事ならず同情してゐたので、此の作を讀んだ時は、主人公吃音者に對する課長の如く涙を感じた。吾々藝術のよき作家たらん事を志し、不斷の勉強に惱める者にとつては、他人の事でも我事の如く、感激なきを得ないのである。正直のところ評者は、作家としての小島氏には殆んど絶望してゐたのであるが、此の作品の出るに逢ひ、始めて氏の將來に期待を持つに至つた。

傑作「一枚看板」は、約半年たつた大正十二年二月の「表現」に出た。

講釋師伯龍は、女房のある身なのに大阪へ興行に行つた時出來た帽子屋の娘の婿に入つてしまふ。けれども一度志した藝が忘れられないで、又東京に逃げかへる。さうして師匠に詫を入れ、再び高座に上る身となり、遂に眞打となる迄の、藝人の身の上と、藝道の勉强悟得とが描かれて居る。兎角ちいさく纒らうとする傾向のあつた小島氏としては、處女作「睨み合」以來の長編で、「喉の筋肉」に遙かに勝る大作である。規模の大きい事、人間の心の奥底に入つて行た事に於て「喉の筋肉」よりも更に徹底してゐる。寫生文や皮相寫實では無く、深味のある構想に對して、正統リアリズムの正攻法を用ゐた描寫が作者の力量にあまる事を示すやうな、筋立の冗漫に先づ非難の第一矢を向けられさうだが、藝術創造に對する作者の澎湃たる意力は、其の冗漫を冗漫と思はせず、筋立の破綻なんか如何でもいゝと思はせる。どつちかと云へば弱蟲の小島氏に、此の意志の力のある事を見せつけられて、時にものうからんとする評者の如きも、感激に身内が震へるのを覺えた。

いふ迄も無く此の一篇は、主人公伯龍の口づから聞いた身の上話を小島氏が書いたものに違ひ無いが、それは以前の作品の如き筋書やお話ではなく、完全に小島氏のものとなり切つてゐる。生きた人間そのものが、あるがまゝに描かれて居る。書

齋の机の上から生れた人間ではなく、正に母胎内から出て來て、七千萬同胞と共に社會を形造つて居る人間である。

伯龍が、昨日の自分と今日の自分との相違を識つたところで、作者は斯う云つてゐる。「自信と云ふものが、これ程人の心を變化させるものかと驚かずには居られなかつた。高座の上で云ふこと爲すことに安心があつた。混沌として居た彼の世界に、一條の道が附き始めたやうな氣がした。若しこの前後に仔細に彼の高座を聞いた人があつたら、彼の藝に柔軟性（フレキシビリチー）の生じたことを見逃すことは出來なかつたらう。」

「要するに、藝の根本義を把握することが出來たのだつた。講釋そのものは死物だ。それを生かすのが藝だ。では藝とは何か、彼はそれを自己だと悟つた。高座に上つて一席よむ、その時の藝術家彼は、その瞬間までに於る生活全體の堆積だ。――彼はさう觀じたのだつた。藝といふものを、自己以外に存在する「型」か何かのやうに思つてゐた不明を彼の心の底から恥ることが出來た。」

此の言葉は直に小島氏の上にうつす事が出來る。小島氏の藝術には、著しく柔軟性が增した。藝術は卽ちおのれに在る。自己の生活である。一作を爲す事は卽ち藝術家の生活全體の堆積だ。自己以外に藝術が存在すると思つて居た不明を、小島氏も痛切に悟つたのであらう。若しこれを深く悟つたならば、やがて文壇の一枚看板たる事は疑も無い。

此の悟が出來てから、最早小島氏は、お話を弄ぶ旦那藝を離れて玄人になつた。「新聞廣告」「兄弟」の如き作品は、「喉の筋肉」や「一枚看板」の如きすぐれたものではないが、これとても以前のものに比べて、いかに玄人らしくなつたか、又いかに作者の世界が廣く深くなつたかを示してゐる。

それよりも面白いのは、藝術が自己にある事を悟つてから、此の作者も始めて自傳體の小說を書いた。最近の傑作「家」がそれである。續いて出た「住」がそれである。これらの作品を讀むと、曾て此の作者には全く無かつた哀切な感情に誘はれ

る。作者が心の底から動かされた事件の記錄として、立派な藝術品であると同時に、一字一句の文字のうちに、作者の憤りと涙が宿つてゐる。曾て拮屈といふ外に適評を見出さなかつた此の作者の文章に、惻々として人に迫る情熱の生じて來た事は何よりも悅ばしい。此の力を失はない限り、永く迷路に難澁し、修業の苦勞に惱んだ小島氏も、やがて動かす可らざる自己の藝術境に押も押されもしない自信を持ち得る日が來るであらう。（大正十二年八月十五日）

所感

大正十二年九月一日地震の時、自分は鎌倉に居た。家は倒れ、危く身を以て逃れたが、十數人の同勢の中で、親類の十八になる娘が一人逃遲れて下敷になつた。それが不思議に微傷も負はずに這ひ出して、芝生に集まつた一同が互の無事を祝しあふ間も無く、再び海嘯に脅され、女子供を勵まして裏山の松林に避難し、一息ついたと殆ど同時に、東西に起つた火事の煙は、松林にもかゝつて來るのであつた。頼みにする者よりも頼みにならない者の方が多く、底冷のする土に敷いた荒筵の上に二夜三日露に濡れ雨に打たれ、山崩れの音を聞きながら、食糧の乏しさと、鮮人襲來の流言に心を寒くし、其後は又病人の續出に、如何なる身の末かと心細く、由井が濱一帶の慘澹たる光景を山の上から見下して、人間の意氣地なさを歎いたのであつた。

地震國に生れて、安政の大地震の話、濃尾の震災の繪畫も記事も幼い心に深く印象され、其慘害の酷しさを知識としては充分知つて居たが、のべつに起る小地震にづうづうしくなつたのと、これ無くしては一日たりとも安閑としては居られない人間の樂天的な心持から、自分自身がさういふ目に遭はふとは、思ひ及んだ事も無かつた。然るに今度は、聞いたよりも想像したよりも殘酷に襲來し、何等抵抗する術も無くやつつけられた後でも、餘の事のはげしさに、現實の事とは思はれず、夢では無いかと疑ふ事が度々あつた。又、不思議にも、地震以後、自分は夜中に樂い夢を見た。覺めた曉、雨戸も無く壁も落ちた他人の家に、左右に病人を抱へて轉がつて居る自分を見出した時は、泌々なさけなく思つた。

それでも未だ、斯ういふ不運に遭遇したのは自分達及附近の人達ばかりで、一足此地を離れると、安穩な場所が待構へて居て、温い懷に抱いて呉れるやうな氣持がして居た。横濱は全滅し、東京も下町は焦土に歸したと聞きながら、一望の下に在る鎌倉以外は現實の事として腦裡に描く事極めて明確でなかつた。

けれども、東京に歸つて、九段の上や上野の山から、見る限りの燒跡を望み、日本橋や京橋の眞中に立つて、四方八方何處にひとつ昨日の面影を止めて居る所の無いのを見た時は、辛ひに命を保ち、住居も燒殘つた自分さへ、身の置所の無い、生甲斐の無い心持にうちのめされてしまつた。天變地異の暴威の前に、小賢しい人間の力は、在つて無きが如きものに感じられた。

けれども、此の意氣地の無い心持は、存外長くは續かず、日を經るに從つて、人間の力が蘇生して來た。恰も病人が回復期に向ふと忽ち昨日迄の苦痛を忘れてしまふやうに、地震海嘯火事に脅された時の驚愕よりも其の暴力に對抗して、人間力のあらん限り戰つて見ようとする意志の方が自分を支配し始めたものである。殊に事變後旬日を經たか經ないうちに、至る所にバラック建築が始まり、天幕の假住居をしながらも、互に商賣を營み始めた避難者の活動を見た時、自分は痛烈に人として

の生甲斐を感じた。けなげなる堀立小屋の居住者は、帝都の復興に希望を持て。昔日にも增した生活力を發揮して來たのである。家を燒いた者、財產を失つた者、最愛の者に死別れた者、すべてが悲嘆のどん底から復活して來た。末だ衣食は足らざるも、折柄の滿月の下に、バラックの內で笛を吹く者さへあつた。

日本を愛し、日本で死んだ詩人ラフカデイオ・ハアンは、日本人の生活樣式の一切が、持續性を缺いて居る事にさへ親切なる解釋と懇篤なる說明を惜まなかつた。朝出がけに通り過る空地に數人の人の立働く姿を見ると、夕方には早くも家の形をしたものゝ建てられる御手輕な生活に深い興味を感じ「時は一切を滅す」といふ思想が、如何に根强く國民の魂に浸み込んでゐるかを說いた。ハアンをして今も尙世に在らしめば、バラックの窓に秋草の鉢を置き、天幕の內に芒を立てゝ月を觀る人々の生活を、どんなに深い感激を以て見るであらう。

乍然漂泊の詩人ハアンが愛した日本は、ひと昔もふた昔も前の日本である。地震直前の日本は、生れたる國の文明に慊らずして異鄕に安住の地を求めた詩人の異國趣味を滿足させるやうな箱庭ではなくなつて居た。山河の外の一切の人爲は、はかなく消ゆるものとあきらめて、竹と紙の家に滿足する國民ではなかつたのである。現在到る處に見るバラックは、簡素なる生活を營む事の天才を示すものではない。やがて吾々の努力を以て築く可き、地震にも火事にも堪へ得る大都の礎に外ならないのである。

自分は「方丈記」を古今の名文として愛誦するものであるが、「行く川の流れは絕えずして、しかももとの水にあらず、よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとゞまることなし。世の中にある人と住家と、またかくの如し」と徹底的厭世觀をもつて世にのぞむのは堪へ難い。堪へ難いばかりでは無く、凡そ此の人の世の生を絕たんと思はない限りは、例令行く川はもとの水で無く、うたかたは消えてはかなくとも、人のつくる世の中は、祖先以來の人間の動かし難く消し難き努力

の堆積であると觀じ度い。

今回の災害に面して、自然力を絶大と見、人力を在つて無きが如くに考へる人も、さぞかし多い事であらう。鐵筋コンクリートや煉瓦の四層五層の近代建築が、見る影も無く焦土の中に姿をけしたのを見て、文明の頼む可からざるを嘆じ、いち早く自然にかへれとさけんで竹の柱にかやの屋根の生活を讃美した人もあつた。ましてや既に人生の春も幾むかしか前に過て、心身の活力も慾望もおとろへた老人達が、得たりかしこしと近代文明の弊を論じて、徒らにむかしをなつかしむのは云ふ迄も無く、悲々の如き慾情を以て幾多の婦女を犯し、口に公德を唱へて實は私利私慾を營み、富と位とあはせ得たる老爺が、口幅つたくも此の災害を呼んで天譴となすが如き、思想貧弱にして他に言葉を知らざるに出るものかもしれないが、ともに復興を語るに足らず、此の人々を頭にして、よく災害の善後策を講じ得るや否や、疑はしさの極みである。

なる程、明治以來日も足らず、あくせくと輸入した西洋文化の一面を代表する極めて皮相なる模倣建築物はひとたまりも無く倒潰した。しかし、倒れたり崩れたりした物は全部では無い。僅少ながらも、堅固な手法を以て築いた建築物は、壁にひびさへ入らず、硝子一枚碎けず、びくともしずに殘つてゐる。彼と是とを比べれば、外觀のみをごまかした物は瓦礫に等しく、材料と勞力とをおしまず勤勉正直にたてたものは何時迄もそびえてゐる。此の事は我々に尊い教訓を與へた。日本の一部東京附近の慘狀は見るに忍びないものであるが、これがすべての終では無い。東京は今も尙いきてゐる。今度こそは、どんな地震にもどんな火事にも、平然として堪へ得る大都となる可きである。自然力は偉大である。しかし人間力も亦決して之におとるものでは無い。既に吾々の祖先の世から今日迄の人文發達の歴史は、自然の征服の記錄だと云つてもいゝ。幾多の失敗を繰返し繰返して、兎に角今日に至つた。日本近代の模倣文化の外觀は無殘に倒潰燒失したが、それを以て今日迄の人文

發達の道程が止んだのでは無い。此失敗の後に更に進歩が來るのである。竹の柱や茅の屋根にかへる可きでは無い。もう一度四層五層にして且地震にも火事にもびくともしないものが出現しなければならない。卽ち現在のバラックに住む人々は、ラフカデイオ・ハアンが愛したる小國民の如く一夜造の家に安住してゐるわけでは無いのである。

同じ事が、あらゆる他の方面の人間の仕事にもあてはまる。例之地震以後の文壇は如何なるかといふ問題に對して、矢張り「竹の柱に茅の屋根說」を臆面も無く說いた人もあり、地震によつて文藝が人生の贅物であると觀じた人もあり、更に又雜誌新聞の文藝欄必ず亡ぶ可しと臆斷して、筆を捨て鋤鍬を執らんと叫んだ人もある。勿論炎々たる猛火に追はれて、行衞も知らず逃げた時に、人はたゞ命の全き事のみを念じて、文藝を思ふ遑は無かつたであらう。住むに家無く、喰ふに食なき避難者の多くが、衣食住の心配の外に何も考へる餘裕を持たなかつたのも事實であらう。

然しながらその爲めに、文藝亡ぶ可しと考へるのは、あまりに膽がちいさ過る。空腹の場合のすゐとんの味に感激して、人はすゐとんあれば他に食物の必要を感じ無いと說くのと同一である。けれども、人は決してバラックですゐとんを喰べて滿足はしてゐない。雜誌新聞の文藝欄は、一時は縮少されるかもしれないが、藝術は決して亡び無い。或は文筆の士が恐るゝ如く、原稿料の下る事はあるかもしれないが、制作慾の燃ゆる眞の藝術家は何時迄も制作に力の限りを盡すであらう。崩れ易い化粧煉瓦の建築と諸共に、あんまり商業主義に支配され過た文壇は潰滅しても構は無い。藝術の價値は、地震の前なると後なるとによつて、輕薄なるヂャアナリストの頭腦の如くに變りはしないのである。

おもへば、我國の近代文藝の發達は、その外觀的文化と同一步調を以て進んだのである。年が年中呼吸切れのした驅足で、西洋近代のあらゆる思想を、何の疑ひもなく撰擇も無く受入れ、更に新しく輸入されゝば、前のものは弊履の如く捨てゝ振

向もしない。恰もデパアトメント・ストアで賣られる商品の如く、徒らに色彩のみけばけばしく、昨日と今日の流行は移り變つたのである。寫實主義、自然主義、享樂主義、人道主義、未來派、表現派、さては歐羅巴の珈琲店に生れたやうな出まかせのダダイズムや渦卷派、又プロレタリアの藝術に至る迄、かへりみて餘りに浮足だつた事を恥なければならない。おのれを空くして世間の目の色によつて態度を變へるやり方は、化粧煉瓦の建築と擇ぶ所が無い。若し今度の災害によつて人が學ぶ可き事があれば、それは赤から黑に變る事では無く、もう一度やり直して、力のある一歩一歩を進むばかりである。久しく輕んじられた自分自身の練磨と、反省と、鞭韃とを以て、今度こそは顧みて恥ない道を歩むべきである。斷じて竹の柱に茅の屋根に復歸してはならないのである。

これは私の希望であり、覺悟である。實際の世の中がよくなるか惡くなるか一に私と同じ希望と覺悟を有する人の多いか否かによつて分れるであらう。光明と共に不安がある。大なる人間の努力がなければ「神光あれといへば光ありき」といふ創世記の第一行の如き、壯大なる景色を見る事は出來ない。（大正十二年十月二十一日）

9

友人久保田万太郎氏

久保田万太郎氏はわたくしの友人で、且現代第一流の藝術家です。

年少にして夙に自分の藝術境を發見開拓し、聰明に之を守り、情緒的寫實主義作家の第一人者として動かす可らざる地位を確立し、微塵子の如く浮んでは沈む文學青年の追隨を許しません。

尤も下手に眞似をする亞流者があらはれると、そいつは鼻持ならぬ程度に甘く、且臭い藝風に陷る事受あひです。

久保田氏としても、現在の藝術境から一歩でも踏出せば、とりかへしのつかない事になるでせう。

問口を擴げたが最後、奥行もなくなつてしまふに違ひありません。

斯う迄も自分にぴつたりはまつた藝術境を見出した事は、すぐれた藝術家として

は當然の事だと云つてしまへばそれつきりですが、一面から考へると、何よりの幸だつたと云ふ可きです。

はつきりいへば、たつた一筋しか道が無く、しかも其の一筋を迷はずに歩んだ人なのです。

卽ち久保田万太郎氏は、現在あるがまゝの久保田氏として尊く、若し少しでもわき道へそれて居たら、それ程偉くならなかつた人だと思ひます。

萬一此の人が作家にならなかつた場合を想像して見て下さい。たとへば官吏になり、軍人になり、會社員になり、商人になり、筋肉勞働者になり ―― 其の外あらゆる他の職業の何にでも携つたとしたら、やくざな人間だつたに違ひありません。

（大正十三年五月二日）

都新聞讃美論

或倶樂部の一室で、現在日本の新聞では何が一番いゝかと云ふ質問をした人があつた。そんな事は問題にならないと云ひ度さうな顔付で「大阪毎日」と「大阪朝日」だと答へる者もあり、東京最負の連中には、「時事」がいゝと云ふのもあり、「日々」がいゝと云ふのもあり、「朝日」がいゝと云ふのもあつて夫々相當の贊成者があつた。「水上さんは何新聞がいゝと思ひます。」

新聞嫌ひで、今日の世の中から新聞が全然なくなつて了つたら、さぞかし人の心はおだやかになり人の世は住みよくなるであらうと常に思つて居る自分は、一隅に腕を組んで口を緘して居たが、此の質問に接して、

「都新聞が一番いゝと思ひます。」

と言下に答へた。

「あれは床屋と藝妓屋で讀まれる新聞だ。」

と、さも輕蔑した口吻で笑つた人がある。他の多くも同意見らしく、「それは論外だ。」と云ひ度さうな顔付をして居た。

「しかし、あの新聞は面白いね。まさか自宅では取れないから、往來で買つて自動車の中で讀む。實は僕も愛讀者の一人なんだ。」

第一流の銀行家で、典型的の紳士だと稱されて居る人が、一大告白をするやうな態度で云ふと、一座も亦非常に意外な事を聽いたと云ふ風な樣子で、俄に相槌を打つ者も續出し、つい今迄は問題外だつた「都新聞」が、斯ういふ種類の人間の間に、特別の興味をもつて讀まれて居る事が明かになつた。

けれども、誰一人「都新聞」が一番いゝ新聞だと云ふ自分の說には贊成せず、面白いには面白いが、紳士としておほつぴらに人前で讀む事は出來ないと異口同音に云ふのであつた。

度し難い連中に對して無用の辯を弄さず、自分は再び口を緘したのであつたが、今日尙「都新聞」を目して最も下等な新聞とし、善良なる家庭に入れる事は出來ないと誤信して居る所謂紳士が多いやうであるから、敢て此の愛讀紙の爲めに、我一票の貝殼を投ぜんとするのである。

さうは云ふものゝ、自分が「都新聞」を購讀するやうになつたのは、實に地震以後の事である。それ迄は昔からの惰性で「時事」を取つて居たが、其社が九月一日に燒て暫時休刊して居る間に、出入の新聞取次店が、勝手に「都」を配達して來たのである。うちの女中の話によると、

「當分時事は出ませんから、新聞界の女王といはれる都をかはりに持つて來ます。」

と配達子が斷つて行つたさうである。

取次店は麴町の通にあるのだがひどく實體な店と見えて、やがて「時事新報」が貧弱ながら復活して來ると、直に「都」をやめて「時事」丈を配つて來た。外の店でよくやるやうな押賣をしないのが氣に入り、且又「都新聞」そのものが一番いゝ

新聞だといふ見極めがついたので、爾來此の二新聞を購讀する事にしたのである。其の時の自分の心持は、切れようと思つても切れられなかつたとでも云ふべきであらうか。將來若し二新聞のどつちか一つをやめるやうな事があるとすれば、自分は、必ず「時事」をやめて「都」を毎朝手にするであらう。

その「都」ではあるが、曾ては出鱈目の記事を書かれて、夢中になつて怒つた事もあつた。もう一昔になるが、大正二年二月一日から同三日に亘つて「親と子」と題する無責任な讀物が寫眞入で出た。今の事にして見ると、醉拂ひの三味線彈の逸話だとか、淪落の女の身の上話だとか、强盜殺人犯の生立の記だとか云ふやうな、此の新聞得意の讀物と列を同じくするものであらうか、「都」にしては文章の極端に拙いのが不思議な位だつた。ちよいちよい消息通らしい文句のあるところから察すると、當時慶應義塾を出たばかりの半熟記者が私の著書を讀んで、その中の小說全部を作者の自傳と解釋し、勝手氣儘に書換たものであらうか、馬鹿々々しいものには違ひないのだが、未だ血氣旺だつた自分は、友達の送つて寄越た切抜きを、亞米利加の下宿の一室に讀んで、口惜涙を流したのであつた。當時若し東京に居たとしたら、恐らく自分は新聞社に怒鳴り込んだであらうが、海を距てた遠方の事とて如何とも爲方が無く、折柄出來あがつた小說「世の中」を「三田文學」に揭載するにあたつて、左の如き斷り書を附記し、僅に欝憤を漏らしたに過なかつた。

此の一編は全然つくりものがたりなり。

かゝる事をわざわざお斷りするは小生の頗る不快に思ふところなれど、世の中には思ひのほかそゝつかしき人のありて、その人々に小生の作品を小生の自傳なりと思ひ込まれて飛んだ迷惑をしたる事一再ならず、近くは大正二年二月一日より同三日に至る都新聞の小生に關する記事の如き、書かれたる當人の身に覺えなき事のみなりき。想ふに彼の鐵面皮にして禮儀をわきまへざる記者は、拙作「もの〻哀れ」「途すがら」「噂」等を讀みて粗忽千萬にも、小生の半生をそのまゝ描き

しものなりと速斷して、常に彼等が貴重なりと稱する紙面にまことしやかに大嘘を書きつらぬる結果に陷りしものならん。かゝる誤解を招く事も世間樣のいやしみ給ふ小說など書きし罰にほかならずと思ひて一度はあきらめもしつれ、小生の爲めに引合ひに出されし人の迷惑を思へば心苦しさに堪へざるものあり。即ち玆に此の一編のつくりものがたりなる事を附記して、たとへば彼の都新聞記者の如きぼんくらの誤解豫防に備ふるものなり。

此の「都新聞」の記事の出鱈目は斯程迄に當時の自分を怒らせたが、たつた一つ出鱈目にも愛嬌があると思つたのは、出鱈目物語の最後に、主人公水上瀧太郎は、「今では英國のケンブリッヂに居る。」と書いて、わざわざケンブリッヂ大學の寫眞を掲げた事であつた。前にも書いた通り、自分は其の時北米合衆國マサチユセッ州ケムブリッヂ町のハアヴアード大學に在學して居たのであつて、ケムブリッヂはケムブリッヂでも、これは大學の名前では無く地名なのである。出鱈目記者は、何處からか生嚙りに聞いて來て、さも得意さうに新聞社に有合せの英吉利の有名な大學の寫眞を出したのであらう。此の笑ふ可きとんちんかんは、當の記事の出鱈目である事を證明すると共に、當代の新聞氣質を最も適確に示すものであつた。

爾來數年間、自分は「都新聞」に對し平かならぬ心持をいだいて居た。ところが大正五年恰も海外の旅を終つて歸朝する事になつた時「東京朝日」を筆頭に、東京大阪の新聞の多くが、更に一層ひどい出鱈目を、臆面も無く大標題をつけて書き立てた。それは、私の父が一生の事業とした仕事の後を繼がせようとするのに、私はどうしても肯じないで小說家になるといひ張るので、父は怒つて此の私を廢嫡するといふ內容の記事である。新舊思想の衝突といふやうな事が、雜誌や新聞の問題になつて居た當時の事であるから、隨分人の噂を煽り立てる事柄だつたに違ひない。長途の航海を終つて、なつかしい故國の土を踏むと同時に、さういふ出鱈目の新聞記事の主人公となつて居ると知るよしもなかつた自分は、忽ち新聞記者の襲擊を受

て、まるつきり要領を得ない質問に惱まされ、しかも其の日の夕刊には、早くも寫眞入で、自分が一言も言及した覺えの無い廢嫡問題について、自ら洒々として喋つて居るのであつた。

自分には立派な兄が二人あつて、新聞が書立てたやうに嫡男では無い。いくら望んでもあとゝりにはなれないのである。殊に父はいろいろの事業にも關係したが、いづれも株式會社で一家の商賣では無く、又他の株主を壓倒する程の金力も無く、且さういふ野望は父の性格としては寧ろいやしむところであつた。息子が後を繼がなければならないと云ふ筋合のものでは無い。ましてや父は、決して無理强ひに子供を勤人にしようとは云はなかつた。親の情愛から將來を氣づかつて、文人となる事は好まなかつたかも知れないが、新聞が傳へたやうなはしたない壓迫を加ふるが如き事は、父の爲さんとしても爲し得ざる事である。今日自分が勤人となつて、生活の資を得て居るのは、全然自身の考へで、これをつまんで云へば、第一には文筆をもつて衣食する事は到底出來ないと考へた事、第二は自分の藝術の清純を保つ爲めに、或は衣食の資を得る手段としての藝術とならないやうにする爲めに、かへつて全く無關係な仕事をして月給を貰ふ事を擇んだからである。

無責任極まる新聞記事に、自分はすつかり怒つてしまつた。なさけない事には、新聞は嘘吐きだと知らない人々、或は新聞は嘘吐きだと知りながら、それが自分に關係の無い他人の身の上の事だと、兎角ほんとにしたがる人々は、其の記事の出た日以來廢嫡問題の主人公として自分を記憶するやうになつてしまつた。そんな古い事を今更いひ立てないでもいゝではないかと、新聞社の人間はいふだらうが、驚く可し約十年の歳月の過た今日もなほ、自分の寃罪は晴れない。到る處で廢嫡問題の主人公として見られ、又中には、完全に廢嫡されたのだと思ひ込んで居る人さへあるのである。

慶應義塾教授小泉信三氏は、曾て「財政經濟時報」に「新聞紙と個人の名譽」と題

する一文を投じた。氏は當代稀に見る温厚なる紳士であるが、正しい事を愛する熱情から個人の名譽を毀傷蹂躙してしかも謝罪しない新聞紙の横暴を許し難しとし、適切なる實例を擧げて之を責めた。その文中の數節を左に摘錄する。

「所謂官僚軍閥財閥又は政黨の横暴、みな何れも許すべからざるものである。併し幸にして是等諸勢力の横暴に對しては、之に對抗し、又は之を牽制すべき何等かの反對勢力があり而して其の勢力の對抗牽制は多かれ少かれ事實上其の効果を現はして居るが、所謂與論の時代の今日に於て、新聞紙の横暴に至つては殆ど之を制すべき方法がないのである。

「事實上幾多の人は、何の理由もなく、公衆の面前で面に泥を塗られて居る。面に泥を塗られながら泣寢入に濟ましてゐるのである。

「構へて嘘を吐くものがあれば固より許すことは出來ぬが、過つて不實の記事を掲げた場合とても、必しも其責なしとは云はれない。間違は誰にも免れぬ事ではあるが當然糺し得べき事實を糺さず、當然取るべき手續を怠つて誤つた事實を報道し、而してそれが爲め無辜の良民に苦痛を與へた場合には、たゞ間違であつたと許りでは濟まされない。

「動物園の虎が死んだと云ふやうな記事ならば、間違があつて人が迷惑するといつても知れたものであらうけれども、事一個人の名譽に關する場合には誤報の害の恐るべきは殆ど想像の外にある。何故茲に一個人の名譽に關する場合と云ふか、公共問題に關する場合にも誤報の害の恐るべきことは言を俟たぬけれども、幸ひにして此に對しては多少の矯正作用がある。政治上の事實に就て一新聞に誤報が掲載されゝば、自らにして反對黨の新聞紙が之を匡す、經濟界に關する記事に謬りがあればその影響するところが廣いから、其記事を攻擊するものが自らにして現はれやう。たゞ一個人の名譽の誤報に依つて傷けられた場合には、其人一人一家族を除いた外の世間は、よし面白半分の見物人でないまでも、極めて冷淡なる

傍觀者であつて、加害者に制裁を加へて被害者の耻辱を雪ぐと云ふやうな事は、殆ど之あることが望まれない。名譽を傷けられた人は新聞紙と云ふ强大なる機關と、其讀者たる廣い世間とを相手にして、孤立單獨に戰はなければならぬのである。今日無辜の民と云ふ言葉の適合するやうな場合を求めるならば、先づ第一に此を擧げなければならぬ。

「固より新聞紙の誤報に由て人を傷けた場合に、之に對する制裁の途が全然備はつてゐないのではない。併し此制裁は今日の日本で果して有効に行はれてゐるであらうか。勿論新聞紙上に正誤の掲げられる事は屢々ある。併し取消さるべき記事と、取消とが同じ程度に人の注目を惹くと云ふことは殆ど考へられない。私は無根の記事に依て或公人を傷けた新聞記者が、過を覺り其人を訪ふて罪を謝した事實を知つてゐる。併し其新聞には攻擊の文章は掲げながら、記者が謝罪の爲めに訪問した記事は掲げられなかつたのである。又我邦の法律慣習は人の名譽を保護することが甚だ不充分ではあるが併し猶ほ現行法規によつても、新聞記事に由る名譽毀損に對して制裁を求める法は備はつてゐるのである。然るに我々は新聞紙に於て某新聞が何某から訴へられて何々の制裁を受けたと云ふ事實の特筆大書せられるのを見たことがない。これは日本人が訴訟を好まぬところから、名譽は傷けられても泣寢入に濟ませて救濟を法廷に求めると云ふことをせぬからでもあらうがまた聞くところによれば、稀に新聞社を告訴して勝訴したものがあつた場合にも、諸新聞は同業者間の德義として口を噤んで其事を默殺するのだと云ふ事である。即ち個人の名譽は白晝公然蹂躙せられ、偶々雪がれた恥辱は全く顧みられずに終るのである。

平生うるさい程正義を旗印にする新聞が、果して斯ういふものだとすると、ごろつきよりも始末が惡い。誹謗脅迫はほしいまゝにして、且何等の制裁を受けない。個人としては名譽を傷つけられても有効に寃を雪ぐ途が無いとすると、泣寢入の外

はない。自分が所謂廢嫡問題の記事に激怒して新聞の責任を問はふとした時、殆どすべての人が、其の甲斐の無い事と後日の報復の怖ろしさを說いて止まなかつた所以もこゝにあるのであつた。

その時、一代の碩學森鷗外先生の小說「灰燼」の中の「新聞國」と稱する一節を讀んで、到底手のつけやうのない相手だと思ひ知つてあきらめろと、親切に勸告して吳れた友達もあつた。「新聞國」の如何なるものかを示す爲めに、その數節を記す。

「此國は新聞の外に何物をも有しない。此國の人民は新聞の種を作る人と、その種を拾つて書く人と、その書いたものを買つて讀む人と三種類に區別することが出來る。

「種を拾つて書くのを職業にしてゐる人が、種を作ることもある。否、書く方から作る方へ廻りたいのが、總ての書く人の希望だといつても好からう。所がさうはならないので、いよいよ燒けになつて書いてゐる。

「種を作る人の大多數は全力を三面を作ることに傾注してゐる。新聞國の中で一番活氣があつて、そして一番馬鹿を見てゐる連中である。此連中は物の一面しか見ることが出來ないから、どこを押へれば、どこが持ち上がると云ふやうな事は考へない。欲しければ人の物を取る。可哀ければ人の女房に手を出す。憎ければ誰でも打ちもし殺しもする。

これでは堪まつたものではない。

乍併自分は、如何に相手が橫暴を極める新聞でも、あんまりひどい出鱈目を書くがまゝに書かせて、默つて置くのはよくないと思つた。

そこで、大正七年一月の「三田文學」に「新聞記者を憎むの記」と題する一文を發表して廢嫡問題の出鱈目である事を明かにし、併せて新聞の無責任を痛罵して、おのれの寃を雪ぐと共に、新聞の反省をも求めたのであるが、それは僅に自分自身溜飲をさげたに過なくて、殆ど何の効果もなかつた。幾百万の新聞は津々浦々迄ゆ

き渡り、「三田文學」は一千數百部しか賣れないのである。加之嘘吐きの新聞記事は、間違ひの無い釋明よりも、事を好む彌次馬にとつては遙に面白い。これ卽ち十年たつた今日もなほ自分が勘當された息子だと思はれて居る所以である。

「新聞記者を憎むの記」を發表した頃、自分はよく銀座の路地の奥の居酒屋に通つた。其處には新聞記者の客が多かつた。或晩、見も知らない人が、

「君は水上君ですか。」

と突然向あつた卓の向ひ側から聲をかけた。

「「新聞記者を憎むの記」なんてあんまり大人氣ないぢやありませんか。あんな事を書くと君のためになりませんぜ。」

薄氣味の惡い微笑を口邊に浮かべて、蟷螂の斧を振ふといふ譬へを引出して說いた。それはまだしもよかつたが、其後問も無く同じ場所で、又一人別の新聞記者が眞正面から喧嘩を吹きかけて來た。

「なんだ天下の新聞記者に對して失敬ぢやないか。生意氣な事をいふとためにならんぞ。」

ためにならないと云ふ脅文句を此の連中は常に用ひて居るものと見えて、前の記者も後の記者もしきりに繰返した。ごろつきや不良少年が、覺えてゐろといふのと同じ意味であらう。

あんまり先方が高壓的なので、自分もむつとして、

「人の迷惑もかへりみず、何等の責任も負はずに出鱈目の記事を書く新聞に對して、自分のいひ分を公にしたばかりの話です。誤を誤とし、非を非として謝まればまだしも、一切無責任だから許せないんです。」

生眞面目に返答すると、先方は益々憤慨して、

「いやしくも新聞記者に向つて出鱈目とはなんだ。無責任とはなんだ。怪しからんぢやないか。」

と泡を吹いて怒鳴り出した。あたりの客は盃を下に置いて目をみはり、おかみさんは帳場から飛んで來て仲裁に入らなければならない光景となつた。成る程、打ちもし殺しもし、欲しければ人の女房にも手を出し兼ない人間だと、鷗外先生の「新聞國」を想起してつくづく嘆息したのであつた。

新聞は恰も封建時代の殿樣の如き特權階級である。殿樣は一個の人間としては値打がなくとも威張つて居られる。腰元なんかは幾人犯しても差支へないが、萬一近習の者との色模樣でも見とがめやうものなら、不義はお家の御法度と稱して、並べて置いて手打にしてしまふ。得手勝手、且何等の責任を負はないところが特權階級の特點である。他人の事ならあくまでも責とがめるが、自分の事になると知らん面をして平然と濟して居る。新聞は此の特權を最も露骨に振廻す。他人に迷惑のかゝるかゝらないなんか頓着する處で無い。嘘でもなんでも構はない。その癖にたまた ま自分の事になると忽ち名譽を云々して居丈高に怒り出す。

曾て某新聞に自分の拙ない小說を連載した時、その一節に新聞の商業主義を難じたところがあつたら、新聞社は作者に無斷で之を抹消してしまつた。

又數年前帝國劇場で上演した永井荷風先生の社會劇「煙」の園遊會の場に新聞記者が出て接待煙草を懷に入れようとするとたんに、打上げた花火に驚いて尻もちをつくところがあつたが、新聞記者を侮辱するものだといふ記者團の抗議にあつて、之を小說家に改めた事がある。試みに「煙」第一幕々切のト書を記す。

以前の新聞記者再び左手木蔭より出て、取り殘したる皿の上の卷煙草を盜まうとする、突然花火の響轟く。新聞記者驚いて椅子の上に尻餅をつく、同時に上の方より花火に仕かけたる風船の達摩ふわふわと落て來る可笑味よろしく左右の木蔭より園遊會の來客男女大勢出で、空を仰ぎながら拍手する。この模樣よろしく幕。

「煙」は社會劇であるが、永井荷風先生の戯曲の常として、北歐風のせつぱ詰つた書方では無く、うつかりすると新派の芝居になり兼ない稍古めかしい手法、例へば

佛蘭西の戯曲家の作によくある傳統的の可笑味を取入れたもので、此の場合最も通俗にお芝居らしく、觀客の笑を誘ふのが作者の意圖である。その目的の爲めには、無遠慮とがさつの代表的タイプでなくては適切でないのに、こわもてのする階級意識から强ひてこれを小説家に改めさせた横暴を、特權階級と呼ぶのは當然である。新聞記者が煙草を懷に入れようとして花火に驚き尻餅をつくのは、一般の人から見れば、道行の御兩人にからむ捕手がとんぼを切るのと同じく極めて自然なのである。無理に小説家にして納まるが如きは餘りに馬鹿々々しい。何故に新聞記者では侮辱になり、小説家なら侮辱でないのか。警視廳が新派の芝居に巡査の出るのをいやがつて干渉すると無理解だと云つて攻擊するのは誰であるか。貴族の横暴、資本家の横暴を口癖のやうに絶叫するものが、斯の如き横暴を繰返しつゝ恥じもせず、悔もせず、昂然として益々横暴ならんとするは如何したものであらう。自分は此の特權階級の全然存在しない世の中の氣安さを、痛切に想ふに至つたのである。

何故に新聞が嘘を吐くかといへば、各社が血眼になつて競爭する速報主義が第一の原因であらう。新聞に同情のある人は、此速報主義を肯定して、多少の嘘は止むを得ないではないかといふ。自分と雖も速報主義を頭からけなすものではないが、過ちである事が判明した場合に、効果ある取消をなし、万一他人に迷惑をかけた時は、潔よく謝罪しなければならないと主張するのである。中には故らに人の名譽を傷つけんとする記事を掲げて、ゆすりに出る者もあるさうだが、多くは他人の迷惑になんか頓着しない無神經無良心から、ふと往來で聽き込んだ種を、惡達者な筆で勝手に捏ちあげるのである。挑發的な大標題と、他の新聞よりも早いと云ふ事丈が重じられて記事の眞僞などは問ふところでない。先手を打つといふ事ばかりに苦しみ、ぺてん立ちであらうとも相手が待つたをしやうとも構はない。

これは或新聞社の人から聞いた話だが、昨秋の地震の時、丸の内に對立して居る二新聞は共に附近迄火の舌が來て正に燒けんとし、先づ甲社の危急を救ふ爲めに乙

社の者も手を貸して防禦に奮鬪した。勿論甲が燒ければ、次には乙が燒ける順序だから、是非とも喰ひ止めなくてはならないのではあつたが、兎に角必死の援助を盡し、惡運强く火の手を免れた。其の時速報主義に更に惡意を裏打ちして先手を打つたのは甲で、直に地方へ號外を發し、東都の新聞社は自分の所丈が助かつたばかりで、他は總て燒失したと報じ、自分を助けた乙社の名前をも燒失社中に加へたと云ふ事である。商賣敵に對する競爭心の極端なあらはれであるが、平素は互に秘密をかばふ無言の同盟をしながら、危急の際になると共喰ひを演じるのである。しかしこれが新聞國では不思議でないのかも知れない。此の甲社こそ最も新聞主義に成功して、發行部數は日々に增加しつゝあると云ふ事である。

さういふ特權階級の中で、たつた一つ最も平民的なのは「都新聞」である。自分が此の新聞を最もいゝ新聞だといふ所以は、特權階級意識の少い點にある。

勿論どの新聞も自分の事は棚にあげて、貴族や政府筋の人間を、特權階級として攻擊し、その一方では例の民衆に阿る調子を濃厚に見せて居るが、しかし心底から民衆的ではなく、實は極めて官僚的で特權階級の最大のものなのだから、平民がつても民衆がつても、それになり切る事は出來ない。此間の消息は、恰も若手の華族が公園の草刈に出動したり、女房に毛絲屋をさせて儲けたりする心持と頗る似て居る。由來迎合と煽動に最も適するものは新聞國の民衆であるから、總ての新聞は民衆の味方であると呼號してゐるが、しかし若し其の民衆の一人或は少數があやまつて集團の外に迷ひ出た時、新聞は決して之を憐れみいたはり友達となり指導者となる事をしない。忽ち聲を揃へて罵り嘲り笑ひものにする。

都會の交通機關の不備が人心に惡影響を與へ、苛々させ、殺伐にし、きちがひ染みさせると新聞はしきりに攻擊するけれど、それよりももつと騷々しく、もつと不整頓な新聞の論調は、遙かに有効に人心を惡化させ、とげとげしくし殺伐にする。斯ういふ惡影響の最も少いのが新聞界の女王「都新聞」である。

成程「都新聞」には海外電報のはしりなどは無い。二段三段を費した大論説も無い。速報主義では平均以下かも知れない。しかしさういふ他の競つて力を盡し、且益よりも害の多いやうな特徴には無關心で、全く方面の違ふ編輯振を示してゐるところは、寧ろ一見識あるものと推奬すべきである。

此の新聞の外に秀でてゐる點は全紙面に統一のある事、文章のうまい事、讀者に親切な事、とげとげしさが無くて温かみのある事等細かく數へると切りが無い。

現在多くの新聞に統一の缺けてゐる事は驚くばかりで、社説と社會面とが同一の問題を取扱ひながら、全く反對の論調を帶びて居る事は屢々ある。或は社説は新聞社の意見で、三面記事は世相の報告だから、予盾して居ても差支へ無いと云ふかも知れないが、三面記事とは云ふものゝ、近頃のは多く單なる報道で無く、主觀的色彩の濃いものが多い。これは新聞の得意とする喧嘩面と、多數に阿る根性のどちらかゞ自らあらはれる結果なのである。

然るに「都新聞」は一矢亂れざる訓練をもつて、全紙面が統一され、三面記事と雖も煽動的氣勢を伴はず、穩かな筆致で報道の使命を果してゐる。

統一は文章にも現れて居る。自分の如きも羞しい事には誤字や假名違ひや格はづれの文章を書いて冷汗を流す方では人後に落ちないものだが、凡そ此頃の新聞紙程此點に於て手ぬかりのひどいものは無い。就中粗製濫造早いもの勝で、後の責任なんか考へない社會面と來ては、種々雜多の破格の文體がづらりと並び、同時に表現と內容とちぐはぐな、所謂新聞語を作り出す。殊に好んで用ゐる片假名と來ては、何とも評する言葉もない珍妙なのが出現する。「女のボオイ」「女のウエイタア」などはまだしもとして、先年佛蘭西の將軍ヂョッフルが來た時の群衆の歡呼が「ビッグ・ラ・フランス」を繰返してゐたのなどは、珍中の珍である。

「都新聞」は假名垣魯文條野採菊時代の文脈を未だに失ひ切らない、多少古くはあるが育ちのいゝ文章で全紙面を覆つて居る。此の新聞獨特の「新道新聞」や演藝だ

よりなどの活殺自在の筆はいふ迄もない事だが、人殺しや泥棒の記事でも他の新聞のやうな誇張の無い、比較的上品な描法を以て一貫して居る。婦人凌辱の記事の如きさへ、下品な新聞がと云はれ勝の此の新聞は、意外につゝましく報じてゐる。さも面白さうに書立てる新聞とは人柄が違ふやうである。一言にしていへばよく事理をわきまへてゐて、脱線する事の少いのが特徴である。

讀者に親切といふ看板は、通俗には「讀者と記者」及「相談」などにあらはれる叮嚀懇切な態度に明かであり、上に述べた統一も文章のとゝのつてゐる事も、考へて見れば讀者に親切だからである。誤植の少いのも附加へて美點とし度い。

右の「讀者と記者」及「相談」の二欄は、自分の最も愛讀するところである。讀者側の主張も、他の新聞の讀者投票欄のやうに揚足取や喧嘩腰でなく、懇談的の物言ひなのが嬉しい。徒らに「都新聞」を下品なりとけなす人は、此の欄を讀んで如何に上品な讀者を有して居るかを發見するがいゝ。心持のねれた雅かな人々の面影は、他の新聞には見られないところである。又之に應ずる記者の答も決して御無理御尤もとおだて上げず、是を是とし、非を非とし、諄々と說いて倦まない態度で、甚だ奥床しい。「相談」に至つては、法律や世事にうとい人々の爲めに、どの位力を與へて居るかはかられない。相談をする人の心持や境遇を想像すると、復雜極まり無い世態人情もうかゞはれ、乘る可き相談には、智惠を貸し、我儘な者はさとし戒め、時には叱責する事さへある回答者の懇切は、自分の尊敬して止まないところである。

此新聞の溫かみは、決して享樂氣分が多いからばかりではない。無責仕な誇張を事としたり、結果を想はない煽動的態度に出る事が無く、行儀よく分を守つてゐる爲めと、讀者に親切である爲めのものであらう。他の新聞を讀むと苛々するが「都新聞」だと平靜な心持を失はずに社會の出來事を知る事が出來る。

意餘りあつて言葉は未だ不足であるが、新聞界の女王「都新聞」の健全なる發達を祈りつゝ一先づ筆を擱く。（大正十三年五月二十五日）

畫家仙波均平氏

貝殼追放

仙波均平（せんばきんぺい）さんと自分とは、ふた昔半ばかり前慶應義塾の普通部で机を並べて居た友達である。當時は未だ生家の岡見姓を名告つて居たが、級中で少し年齢が上の方だつたからか、或は茶目氣の全く無い性質だからか、吾々よりは遙かに大人に見え、且行儀もよく、端麗な風采なので、誰しもさん附で呼び、惡童どもも一種尊敬の念をもつてつきあつて居た。なまけ者の多い學校で、殊に自分の如きは、教場と先生と教科書といふものが性分に合はない爲め、落第しても落第しても懲性も無く、授業時間の半分は年中休み、たまに教場に顔を出しても、返事をして置いて窓から飛び出して運動場に逃げて行つてしまふと云ふ始末で、學業といへば何ひとつ出來なかつたが、人にすぐれておとなしい均平さんも、決して出來のいゝ方では無かつた。

畫家仙波均平氏

しかし均平さんのは、吾々のやうに惡戯をしたりエスケープをしたりするやうな目立つた怠け方で無く、勉强して居るのか怠けて居るのかわからないやうな怠け方だつた。今になつて考へて見ると、均平さんにも學校で敎へる總ての科目が何の興味も與へないので、本來あり來りのいたづらつ子型でない人の事だから、陰性に怠けて居たのだと思はれる。田舍から出て來る子供の多くは、東京に行つて學問をして、偉くならうといふはつきりした目的を持つて居るやうだが、東京の子供は、學校で敎へる事を覺えれば偉くなれるといふやうな簡單な考へは持つてゐないらしい。從て學校に興味も權威も感じないらしい。學問の興味を起させる丈學問に興味を持つてゐる敎師のゐないのも一原因だが、ひとつには各方面に頭がつかへて居る事を不知不識意識してゐて、青雲の志などゝ云ふやうな漠然とした書生さんの理想は、神經過敏で物事に倦き易い都會の子供には湧いて來ないのであらう。

兎に角均平さんは、學校にはおとなしく出席して居たから、吾々のやうに先生に叱られるやうな場面は見せなかつたが、人並以上に眞面目な心の中では、その日その日の自分に滿足しないが、さりとて斯うとつかめないもやもやした煩惱を持つて居たものらしい。それは後日になつてわかつた。

均平さんも野球や庭球の仲間には折々加つた。本家の岡見さんが頌榮女學校を經營して居られるので、廣い地面内には運動場もあつたから、子供の時から戸外遊技には馴染んで居たものと見え、練習なんかしないでも、試合になるとなかなかうまかつた。野球をやると一壘を守り、少し高いそれ球が來ると片手でつかむのが得意だつた。今でこそ片手で球をつかむ位の事は誰にでも出來る藝當であるが、其の頃は未だバウンドを目をつぶらずに取るなどゝいふ事で有名になつた撰手さへある位幼稚な時代だから、まして中學二年生位で、此のはなれわざを演じるのは珍しかつた。大きい聲では物も言はない人が、何の怖氣も無く猛球を片手でつかむといふ事は、其處に何か均平さんの人並でないところを示すものがあるやうに自分には思は

畵家仙波均平氏

れた。

なまけ者の自分にとつて何よりもいやだつたのは體操だつた。他人に號令をかけられて動くといふやうな事は、子供の時から嫌だつたのだ。自由にやらして呉れたら、器械體操なんか存外うまくなつたらうと思はれるが、おいち、にい、さんと聲をかけて、完全に兵隊のかつかうでやらされる爲め、全然忌む可きものとなり、遂に自分は鐵の棒にぶらさがる事を極端に嫌ふやうになつた。今でもたぶんさうだらうが、普通部の體操は古手の大尉か少佐を親方に、下士官あがりの有泉義理作といふ人が萬事を司り、あとは生徒の中から大隊長だとか分隊長だとか云ふのが、ひとかどの名譽のやうに思つて、長劔をつるし、赤い紐で出來たしるしを胸につけ、鐵砲をかついでゐる雜兵を指揮する仕組だつた。今でこそ洋服を着るといへば新聞種になり、ライスカレーが好物だといへば驚嘆される位變に賣込んでしまつた久保田万太郎さんなどは優等生で、小隊長だか中隊長だかを立派に勤めあげたものださうである。しかし自分の如きには、足並揃へて調練をする馬鹿々々しさは、到底我慢が出來なかつた。其處で、器械體操と鐵砲かつぎを免れる爲めに、相棒のぶうさんといふ惡童と共に、自分は喇叭卒になつてしまつた。鐵砲をかつぐ代りに、稲荷山の大銀杏の下で、チテチテタと喇叭の稽古をするのである。ぶうさんの方は後年喇叭隊の親玉になつた位だから、存外眞面目にやつたのだらうが、自分は元々好きでなつたわけでは無く、喇叭の方は下士官先生の目がとゞかず、いくら怠けて居ても構はないと聞いて飛込んだに過ぎないし、且生れつき齒が惡くて到底資格は無いのだから、稽古の時も列の最末端に並んでゐる丈で、結局ドトタテチの五音さへ滿足には出せないで終つた。然るに此の喇叭隊に均平さんも入つて來た。鐵砲には餘程參つたものと見える。頰邊をふくらまして、眞赤になつて喇叭を吹く均平さんの姿は、如何にも似合はしくない丈印銘が深かつたと見えて、今でも明瞭に想起す事が出來る。但し自分は間もなくまるつきり捨鉢になつて體操は全休と決心し、試驗も

受けずに押通してしまつた。

のらくらした日を送りながら、自分には何時の間にか藝術に對する憧憬の念がめきめき強くなつて來た。何かしら自分もやつて見度くて堪らなかつた。その欲望の適當なるはけ口が見付からないまゝに、いろんな事に手を出して見た。

今はなかなか盛んになつて居るさうだが、慶應義塾の音樂會ワグネル・ソサイエティの創立當時の會員にもなつた。大學生ばかりの中に、ぶうさんと自分丈が普通部の一年生だか二年生であつた。ゆくゆくはヴアイオリンをやり度いと思つて居たのだが、創立當時は聲樂部丈で、山の下の幼稚舍の二階で練習をし、音聲がいゝとおだてられて密かに得意だつたが、間も無くその團體の氣障なのがいやになつて止めてしまつた。

又三宅克巳さんが色鉛筆や水彩畫の普及をはかり、中學生の美術愛好熱を高めた時代だつたから、幼少の頃から好きな道で、矢張り同校の同好者のつくつて居たバレット倶樂部にも名前丈は入會してゐた。

四五人の仲間を集めて謄寫版刷の雜誌を出したのも其の頃であつた。運動場で土まみれになつてあばれる時もあり、感傷的な詩歌を愛誦して、何とも知れない涙ぐましい心持になる事もあつた。

さういふ仲間から見て、均平さんは別の世界の人のやうに思はれた。吾々がしたい三昧放縱勝手な日々を送つてゐる丈強く、きちんとしたみなりをして言葉使ひも身のこなしも上品な、恐らく芝居なんか見た事もなさゝうだし、小說なんか讀んだ事もなさゝうな均平さんは、一家一族熱心な基督敎信者だといふ事に結びつけて、一切の快樂を否定する禁慾主義者のやうに思はれた。

いつたいならば、日本の耶蘇敎信者について廻るいやみは堪らないものなのだが、何處かに封建武士の血を持つてゐるやうな均平さんの基督敎は、あく迄もほんものに思はれて、ちつともいやで無かつた。いやしい慾念のあらはれてゐない其の顏は、

西洋の繪で見る基督のやうな面影さへあつた。何といふ取り止めた理由はないのだが、大人になりかゝる頃の鬱憂に惱まされ勝な心から、散歩の途すがら、均平さんの信仰について質問をした事もあつた。つまり自分の如きは、だらしの無い自身にあきたらず、堅固な信仰をもつて安らかな心持でゐるらしく見える均平さんを尊敬もし、うらやみもしてゐたのであつた。

均平さんが藝術を熱愛するといふ事は、久しい間自分も知らなかつた。基督敎を通して西洋の文物に親しみ、音樂美術文學を一通り尊敬する心持を持つてゐる事は承知してゐたが、それに生涯を捧げる程の熱情を胸底にしまつてゐた事には氣が付かなかつた。

學校の圖畫の先生は能勢鶴二郎さんといふ人で、後に肺を病んで死んだが、又とないおだやかな人であつた。外の學科は面白くなかつたが、圖畫は嫌ひでないので、自分もいゝ點を貰つてゐた。流石に均平さんは人一倍綿密な描法で最高點をとつてゐた。しかしそれ丈では、一人前の畫家になれる程の天分があらうとは考へられなかつた。白馬會や太平洋畫會、銀座の勸工場や芝山内の彌生館で催される展覽會に均平さんと一緒に行くと、ためつすがめつ一生懸命で見てゐる樣子は知つてゐたが、それは何事にも叮寧な人だから丹念に見てゐるのだと思ふばかりで、畫家にならうとする心を抱いてゐやうなどとは夢にも思はなかつた。

此の事は均平さんの特徵で、吾々ならば昂奮し、自分の氣持を誇張して發表し度くなるところを、ぢいつと抑へて肚の奥底にしまつて置き、誰人にも賴らず誰人にもほこらず、愈々最後におもひ極めた時は、靜かながらも確實に力の籠つた一歩々々を運んで行くのである。

均平さんの口から、繪かきにならうと思ふといふ事を聞かされたのは、均平さんが普通部を卒業する間際だつた。自分の方も、もう運動場をかけ廻る生徒ではなくなつて居た。學校はつくづくいやだし、うちの首尾はよくないし、いつそ亞米利加

にでも出かけて、商店の小僧か馬鈴薯畑の勞働者になつてやらうかなどゝ考へる事もあつた。一身の處置にも困り、心の不滿と寂しさに惱みもして、何時の間にか友達の數もへり、一人ぼつちになりかけて居た頃で、均平さんに逢ふ事は、とげとげしい心を和げ、正道に立かへるよすがとなりさうな氣もした。

殊に芝白金猿町の均平さんの家を訪れる事は、救の庭に赴くやうな感さへあつた。均平さんの叔父さんに當る本家の御主人は、島崎藤村先生の「櫻の實の熟する時」にも出てゐる人で、その宏大な地面の中には女學校もあり幼稚園もあり、幼稚園の側には分家の均平さんの家もあつた。學校の門を入り、校舍の横手に廻ると、武藏野の郊外の景色そのまゝの栗や櫟の林の中に小徑があり、崖の下にはあやめや葦の茂る大きな池の水の光るのが見え、どんどん進んで行くと均平さんの住居の裏手に出る。此の小徑を歩いて行く時間は、短いながらもなつかしいものであつた。かなめ垣で圍まれた田舍風の質素な家で、人の足音をきくとポインタア種の雌犬が馳けて來る。庭の芝生には蜜蜂の箱が並び、幾百の蜂が日光に羽を輝かして飛んでゐた花壇には春秋の草花が手入よく植えてあり、均平さんの室の窓には桃色の鸚鵡が終日奇聲を張上げてゐた。子供の頃の自分の夢をはぐくんだナショナル・リイダアの中の繪のやうな景色だつた。殊に春四月頃、垣根の外の空地に立つ一本の白木蓮の花の盛は、其後時々夢に見る程美しいものであつた。眞青に晴れた大空の下に、純白の大輪の花の群つて咲くのが、清淨なる一家の象徴のやうに思はれた。

御兩親でも、兄さん達でも、きれいな妹さんでも、誰もが此の家の外の世俗人とはまるつきり違ふ型だつた。自分の家のやうな新興階級ではなく、舊家の古めかしい傳統の中に、つゝましやかに、ひたぶるに、信仰にいきる人々だと思はれた。清教徒の家といふ感じであつた。

清教徒か禁慾主義者として見てゐた均平さんが、感覺を主とする異端者の道に踏入らうと決心したのだから、自分は全く驚いてしまつた。自分とても、なれるもの

なら小説家になり度いと考へる事もあつたが、紅葉先生とか鏡花先生とかいふやうな偉い作家の作品を見ると、到底自分のやうなやくざな人間では一人前にはなれないと思はれ、殆んど實際問題として追及する事などは頭に上らなかつたのに、自分よりも一層藝術家としての天分は惠まれてゐないと内々きめてゐた均平さんが、敢然として畫家になるといふのだから、寧ろ第一番に其の前途をあやぶんだ。とても物にはなるまいと思つたのである。

普通部卒業と同時に學校をやめてしまつた均平さんは、どういふつてがあつたのか、太平洋畫會の研究所に通ひ出した。わざと異様な風をして得意がり、ふしだらを自由と心得勝の畫學生にまじつて、ストイック派の學徒の如き均平さんは頗る眞面目に勉強を續けた。

或時自分は均平さんにくつついて、上野の山のうらの方にある其の研究所に行つて見た。生きたモデルを使つて寫生をするのだといふ話を聽いて、そのモデルが女で且裸體であつてくれゝばいゝと思ひながら、強い好奇心をもつて行つた。がらんとした室内のあつちこつちに陣取つてゐる學生の間に、たつた一人向ふむきの銀杏返の女がゐたが、間もなくそれが中央のモデル臺へ上つたと思ふと、正面を向いて、はをつてゐた單衣を脱ぎ、全身裸體で椅子に腰かけた。平顔の、目鼻立の哀れつぽい女で、營養も皮膚の色も惡かつた。一絲もつけない女の姿は決してみだりがましいものでは無かつたが、何となく可哀さうな感じのする其の女の顔は今でもよく覺えてゐる。

當時均平さんは主として靜物を描いてゐた。庭に咲くダリヤ、薔薇、シネラリア、バナナ、オレンヂ、林檎、葡萄、トマト、玉葱、馬鈴薯、人參、コップ、西洋皿、フライパン、古瓶といふやうなものである。稀には風景もあつたけれど、自然の觀方が定らない爲めか、見て感じるものを其儘畫布に盛上る把握力が伴はない爲めか、靜物に比して著しく見劣りがした。尤も其の靜物も、自分などには餘りに生眞面目

畫家仙波均平氏

な密畫で、且色彩に新鮮の感がなく、一口にいへば「古い」といふ日本の洋畫壇流行の評語によつて手輕に片づけられさうなものに見えた。

ほんとに繪畫を鑑賞する眼が開かれず、單に新しい刺戟ばかり求め、雜誌や新聞の上で文學的に紹介される近代的畫風に憧れてゐた自分などには、こつこつと自己にのみ忠實に勉强してゐる均平さんの靜物畫の如きは、心を引く事が少なかつた。今は大阪の生絲會社に勤めてゐる岡田四郎君などゝ、內々均平さんの將來をあやぶみ、且其の畫をけなしたものであつた。

「又均平さんの古瓶か。」

「どうも感覺が眠つてゐるよ。」

などゝ生意氣をいひ合つたものである。がむしやらに智識慾に燃え、無制限に新しい感覺の世界を求める年少者の心には、沈靜なる畫風は訴へるところが少かつたのだ。

ところが其の均平さんの靜物が、間もなく文部省美術展覽會に出品された。つい此間迄學校で顏を合せてゐた均平さんの繪が、玄人の中にまじつて公開の場所に出たといふ事丈で充分驚異だつた。しかも鑑別の結果褒狀を貰つたので、吾々は又更に驚きを增した。さうして均平さんの繪に相當の値打のある事を知つたのだが、しかもなほ自分の眼を以てしては、それ丈の價値を認める事は出來なかつた。

つゞいて又他の展覽會で、均平さんの靜物は再び褒狀を受けた。

其後均平さんは暫時の間靜岡縣下の中學校の畫學の敎師となつてゐて、やがて東京に歸つて來ると、今度は自分が外國へ勉强に出かけたので、爾來均平さんの作品に接する機會が無くなつてしまつた。そればかりで無く、字が下手で文章が下手で、おまけに筆不精の均平さんからは、何時の間にか消息が途絕え勝になり、自分が倫敦にゐる頃、均平さんが紐育へ渡つた事は聞いたけれど、何處にゐるのか何をしてゐるのかも知らなかつた。

畫家仙波均平氏

大正五年に先づ自分が歸朝すると直ぐ、猿町の均平さんの家をたづね、母人と、出立前に結婚した夫人とに御目にかゝつたが、留守宅の方にもちつとも便りが無くて困るといふ話だつた。それつきり、今年の此の迄頃、自分と均平さんの間には、一通の手紙さへ往復しなかつた。誰に聞いたのだか忘れてしまつたが、あんまり長く均平さんが歸つて來ないのみならず、手紙の上ではどういふ積りでゐるのかもわからないので、母人の勸めで夫人が乳呑兒をつれて亞米利加迄御迎ひに行つたといふ事だつたが、その話のあつたのも今から既に五六年前になるであらう。

此の四月、突然均平さんがたづねて來た。十三年目の對面で、お互に年齢はとつたけれど、逢つて話をして見ると、むかしのまゝの均平さんだつた。

「君は變らないねえ。」

「君だつてちつとも變らないよ。」

と双方同じ事を云ひ合つた。噂の通り、あんまり消息が無い爲め、夫人は後を追かけて行つたさうだが、健康を害して引かへし、均平さんは一人で佛蘭西に渡つて、巴里はモンマルトル邊の畫室に閉籠つて勉强して來たのであつた。

均平さんは矢張り均平さんで、全く自分一人の道を歩いて來た。隨分地道に眞正直に勉强して來たにも拘らず、

「やうやく調子がわかりかけたばかりだ。」

と云つてゐる。それでも太平洋畫會時代の友達に勸められて、携へかへつた數十枚の繪を、近日中に世間の人に見て貰ふ積りだと云ふ。其の畫に就いては、中村彝さんが批評されるさうであるから、自分の如き素人が口を出す可きではないが、最もよく制作者の人となりを知つてゐる强味で、些かその畫に現はれたる人格の片影を記して見度い。

均平さんの巴里土産を見ると、その根本に於ては十數年前とちつとも變つてゐない。その人がむかしのまゝに延びて來たので、繪も亦これに伴つて發達した。しか

し昔の作品と今の作品との間には、非常な相違がある。著しい進歩である。それは何であるかと云へば、制作者の人間が力強く畫面に現はれて來た事である。自分の見た繪の多くは、靜物と人物で、風景は僅かに四五枚に過ぎなかつた。矢張り靜物と人物が一番面白いと均平さんも云つてゐるが、風景畫は畫品が著しく劣つて居る。しかし各々の繪の出來榮には優劣があるけれども、どの繪をとつて見ても、均平さん其人と面接してゐる感がする。一時の流行を追はず、一人で道を拓いて行く人の藝術の强味は其處にある。

均平さんは流行に支配されない人である。自分の信念を曲げない人である。印象派がはやると無闇に畫面が明くなり、草土社があらはれると急ち畫風が暗くなるといふやうな、カメレオンの如きうつりかはりは、良心が許さない人である。だから巴里で勉强して來たには來たが、近頃の多くの巴里歸りの畫家のやうに、現在の彼地のはやりの畫風を摸して來たといふやうな事はしない。どつちか云ふと古典的の趣味を持つてゐる人だから、近代的の感覺的な畫風ではない。筆數を省いて、對象の生命を暗示しようとするのでは無く、どこ迄も綿密に描いて、自分の心にしつかりと感得してゐるものをあく迄も描き出さうとする。一時代の鑑賞に樂々と迎合するものでは無く、時代意識を離れたところ、古の工人の心持にも似てゐる。先人の作を見ても、均平さんは現代の大家の作品よりも、文藝復興期時代のものに感激したらしい。

均平さんが昔のまゝの宗教的信仰を持つてゐるかどうかは知らないが、少なくとも畫面を統一してゐるものは信仰か、或は清淨を尊ぶ倫理觀であらう。一目見て、晴れやかに胸の躍るやうな輕快な筆觸や色彩はないが、默つて暫時見詰めてゐるうちに、襟を正さなければならない心が起る。此の清教徒の家の子には、浮調子な世俗の騷々しさを避けて、寺院の靜寂のうちに一人端座する事を喜ぶ血が傳つてゐる。裸體の女を描いても、恰も懺悔する者の告白の如く、意味深く聞かれはするけれど、

まざまざと肉の香はしない。誰人にでも身を任せるであらう巴里の安モデルを描いても、その女のよき心ばかりを均平さんは見てゐるやうである。描かれた女の顔に、邪惡の陰影がない。

その色彩に於ては殊に獨特のものを示してゐる。古池の水錆の浮いた水の如き青、藍瓶にさす曉の光の如きインデイゴオ、尼僧の身につける衣の色のセピア――それらを主色とする物の陰影は、重く靜に稍冷く人々の心に泌みる。たとへばカトリック教會の内部の如き感じである。恐らくは此の色調は均平さん以外に、古今東西に一人もないのではないだらうか。空のあかるい佛蘭西や白耳義の風景を描いても、暗いかげは消えない。その爲めに多くの人には、最初見馴れないうち、親しみ難く思はれるかもしれない。

しかし均平さんの畫は決して冷いものでは無い。色こそ寒色が多いけれども、つゝましやかな柔かい温かさが、畫面に浮んでゐる。育のいゝ娘の微笑の如く、かすかながらも美しい優しさが、花にも人にも馬鈴薯にも絡つてゐる。巴里でサロンに出品した繪の如きは、ラフアエル前派の詩情に似た感じを漂はせてゐる。

舊家の正しい傳統をうけつぎ、深い愛の宗教を心とし、清淨に身心を持して來た人の求むる美は、極めて内面的のものであらう。はなやかな色彩にも、陽氣な音樂にも縁は遠いが、しかも描かれた植物も人間も、此の世に存在する一切のものが、此の畫家の目には平等に尊ぶ可く愛すべきものと見えるらしい。さうしてその描かれたあらゆるものは、古瓶もフライパンもトマトも玉葱も、すべてが正しい倫理觀を持つものゝ如く端然と、すべてが神の惠に安んじてゐるやうに靜かに滿足の微笑を浮べてゐる。（大正十三年五月二十七日）

帝國劇場の質問に答ふ

問

拜啓初夏之候益々御清榮の段欣賀の至に御座候偖而暫く休刊致し居候雜誌「帝劇」も目下工事進捗中の帝國劇場復興竣成に先立ち復活仕り茲に臨時號を發刊致す運びに相成候就いては此機會に臨み別項の如く貴下の御希望或は御趣味の程御伺ひ申し同號を有意義に發揮仕度存候何卒御多用中の處恐れ入候得共折返し御返事賜はり度伏而御願申上候　敬具

一、復興する帝劇に對しての御希望

一、舊劇、新派劇、新劇、飜譯劇、舞踊劇の中貴下は何れを好ませらるゝや

大正十三年五月二十一日

丸の内　帝國劇場

答

一、女優を欲しがる華族や金持の息子、金を欲しがる文士などにくちばしを容れしめず帝國劇場は帝國劇場の所信を斷行すべし
但し助平と藝術を理解せざる事に於て並びなき大株主を隱居せしむる事
附卑猥と慾張の象徴の如き老爺の胸像を再び玄關に並べざる事
一、是を是とし非を非とす

大正十三年五月二十二日

水上瀧太郎

友はえらぶ可し

妻をめとらば才たけて
顔うるはしくなさけある
友をえらばば書を讀んで
六分の俠氣四分の熱

戀のいのちをたづぬれば
名を惜むかなをとこゆゑ
友のなさけをたづぬれば
義のあるところ火をも踏む

友はえらぶ可し

これは、明治三十年代の文學書生が、もだもだした胸の血汐の高鳴りといふのに惱みながらうたつた與謝野寛氏の詩である。

友に親友と益友とありといふやうな事を、小學時代に敎はつた記憶があるが、人の世の複雜極まり無いことをつくづく思ふ此の頃、殊更友達はえらぶ可きであると考へる。學校時代からの友達、文學を楔として結ばれた友達、勤先の友達――いろんな種類いろいろの型の友達のどれもこれも、自分の友達はいゝ友達である。先方はどう思つて居るか知らないが、現在つきあつて居る友達は、みんな親友だと思つてゐる。道學者が見たら、果して益友であるかどうか知らないが、自分は益友だと思つて居る。癖癪持の小人の悲しさには、時には其の友達に對しても、むかつ腹を立てて怒る事もあらうが、さういふ行違ひは一時の事で、矢張り友達はなつかしい。

一體に氣が重く、誰とでも面白く話の出來る方では無いから、一面識の人と直に打解けて談笑するといふ氣分にはなれず、從て友達の數は極めて少ないが、そのかはりに何たる幸運であらう、粒撰の友達ばかりである。

玆に自慢らしく公言する所以は、たまたま雜誌「女性改造」に、故人有島武郎氏の友達――有島氏の好みから察すれば、恐らく氏はお友達と呼んだであらう――大橋房子といふ人の「テマの解けた氣持」といふ一文を讀んで、如何に有島氏が惡友――といふと何となくすつきりした感じが伴ふが、いひ得べくんば賤友と呼び度い――に取卷かれて居たかを、殆ど公憤に似た心持を以て痛嘆したからである。

自分は有島氏とは一二度多數會合の席上で挨拶した事があるばかりで、親しく逢つて話をした事は一度も無い。有島母堂と自分の母がおつきあひが有つた關係か、母は武郎氏を知つて居て、先方からも折々著書を贈つて呉れて居た。母は頻に武郎氏の人となりをほめ、殊に夫人に先立たれた事に對し、ひどく同情し、從て其の作品中妻や子の事を書いたのだと思はれるやうなものは、涙を流して讀んで居たやう

である。婦人を取扱ふ事に強い興味を持つて居たらしい有島氏は、六十を越したお婆さんに對しても、自ら物腰柔かに接したものと見えて、平生我が子の強情とぶつきら棒を心配して居る母は、武郎氏を見習へといふやうな事さへ口にしたものである。亡き妻に對する愛を失はず、獨身で子供達の世話をし、品行方正で、年寄にも親切だといふやうな事を數へて、我子の手本と考へたのであらう。但し生涯の終に、人妻と心中をした事については「困つた事をして呉れた」といふ一言で、目はしの利かなかつた事を悔るのか、又は母堂や子供の事を想ふのか、涙ぐんで居た。矢張り女にもてない我が子の方が無事でいゝと考へ直したかも知れない。

有島氏とは一二度同席したばかりで、親しく話をした事が無いと書いたが、是非一度は逢ひ度いと思つて居た。それは下の如き理由の爲めである。

或時、自分のところに、全く見も知らぬ若者が金を貰ひに來た。其のいふ所によると、彼は私がどんな人間であるかも知らず、私の著作などはひとつも讀んだ事も無く、單に金をねだる爲めに來た。どういふわけでねらひをつけたかと云ふと、有島氏に教へられて來たのだと云ふのである。彼は私を非常な金持だと思つて來たらしく、貧弱な借家住居で、家具調度も滿足には揃つて居ない有樣を見て、意外のおもひをした事を正直に告白した。此の若者は所謂文學青年では無く、直接行動を是認する一派の主義者であつた。知識を輕蔑し、讀書人を罵倒し、彼自身が信ずる主義さへ、理論的に主張する事を知らなかつた。そんな事を知つて居る奴は、彼の罵る無用の讀書人なのである。さう云ふ傾向の人間だつたから、有島氏の書く物なども讀んだ事は無いと云つた。しかも有島氏を讃美する「偉い」といふ言葉を、幾十度繰返したかわから無い。「その偉い」といふのは、何時行つても多少の金を呉れるといふ事に主として係るものらしかつた。又その當時新聞種になつてゐた有島氏の財産擲棄問題も、彼の激稱する所だつた。彼の言葉を信ずれば、有島氏は此の連中に對しても、母堂が財産投出しに反對するのを歎いて居たさうである。「あのばゞ

あがよくないのです」と、失禮な言辭を以て若者は憤慨した。

自分は此の話を聞いて、むらむらと不愉快になつた。母堂が、妻や子の爲めに亡夫が殘した財産を守らうとするのは當前である。勿論ありあまる財産を持つて居る者が、これを投出さうとする心持も充分了解出來る。しかし、假に有島氏一人が親讓の財産を投出したところで、それは人心に或刺戟を與へる效果はあるだらうが、何等直接社會の幸福を增すものでは無い。若し有島氏が斷行したら、忽ち自分達の懷も溫まるかの如くに考へてゐる此の若者のやうな連中には、惡影響さへ及ぼすであらう。結局自分一人の心持をさつぱりさせる爲めの投出しならば、年老いた母堂の心を亂し悲しませる事無く、寧ろ其の親讓の財産全部を母堂に返戻し、自分は希望する如く無資産者となつて隱居し、且住心地の惡い大いなる邸宅を去る可きである。自分は眞顏になつて、有島母堂の爲めに辯じたが、勿論若者は肯定しなかつた。社會の爲めに財産を投出すのだから、一人の年老いた母親の悲歎などは問題では無いと云ふのであつた。

人に金を與へる快感を味ふ丈の餘裕の無い自分は、此の若者に酒手をやる事を斷つたが、果して有島氏が自分を投錢をする人間として紹介したかどうか、一度親しく糺し度いと思ひながら、その機會を得ないうちに、氏は輕井澤で人妻と共に縊れて死んでしまつた。

自分は有島氏の心中を讃美するものでは無い。殊にあの遺書に對しては、深い疑をいだいて居る。英雄人をあざむくといふか、人は死に臨んでも自分勝手な事ばかり考へ、且眞に言ふ可き事を云はないものだと思ふのである。しかし、あれ丈の人が、相手の女に積極的に誘はれて死に到る迄の苦悶を想ひやると、同情の念に堪へない。正直の處、自分は有島氏を藝術家としては相當の人だつたと思ふが、其名聲程の値打を認め兼るのである。又、あの人の對世間の態度に對しては、不尠不滿に思つて居た。それにも拘らず、其の死を悼むのは、自分の如き煩惱になやまされる友はえらぶ可し

者が、身にひきくらべての同情である。痴人の死として同情するのである。自分は有島氏の心中に就て、人と異る解釋を有して居るが、玆に之を論じる事は差控へて、急いで本筋に入る事にする。

扨て「テマの解けた氣持」の筆者大橋房子といふ人とは、幸にしておつきあひが無い。元來、自分自身にしても、他人の事にしても、餘りみなりに新奇の趣向を凝らすのを嫌ふ傾向があるので、斷髪で賣込むが如きは好まない。時々雜誌新聞に發表された意味ありさうな發想法で、しかも何ものをも暗示しない內容の空漠な文章を見るとなさけなくなる。女だからこそ文壇の色どりとして存在し得るのであらうが、これが男だつたら、斷髪のかはりに長髪をなびかして練廻つても、到底かへりみられはしないであらう。何時も口癖にいふ事だが、何處迄女は得なんだらうと思ふばかりである。

尨大な地球の、打ち貫き得やうもない太鼓腹を中に、故國に殘して來た愛するものたちとの交信の久しく打ち絶えた不安と焦慮との極みに在つた時、ゆくりなくもふと耳にした親しい友の死ほど、切實に、私に死そのものゝ臭氣を嗅がせ、狂はしい昂奮の渦卷の只中に容赦なく私を捲き込んだものが、今までに嘗てあつたとは、思ふことが出來ません。

これは「テマの解けた氣持」の冒頭の一句であるが、何といふこけおどかしな書方であらう。文章道の第一義は正確明快なる事である。斯う迄不正確不明快なのは意味の無い事を意味あり氣に裝ふものといふ可きである。此の調子で、長々と書いてあるのを讀むには非常な努力が必要である。すらすらと讀流しては、何の事だかわからない箇所が澤山あつた。白狀すれば、自分は正しく理解する爲めに、不愉快を忍んで二度讀んだ。

何故に自分が腹の立つ程不愉快に思つたかといへば、此の廻りくどい、時代遲れの感傷的な一文中に、何ともはつきり現はしてはないが、何かしら意味ありさうな

自身の苦悶に惱んでゐる事を書いて、自分の輪廓を大きく滲ませようとしながら、當の有島氏がひどく下らない人間に描かれて居る事である。死んだ友達に對して、形式的の讃辭や弔辭を贈る事をいゝ事だとは思はないが、少なくとも親しい友達の追憶を描くにあたつては、その人間をいやな奴にはし度くない。稍古めかしい心持かも知れないが、それが親友の間の純粋の友情であらう。

勿論有島氏の如き文學史に殘る公人の人となりは、成る可く正確に傳へるのが本當で、「テマの解けた氣持」に描かれてゐるやうな一面を眞實持つてゐたとすれば、つゝみかくさず書傳へるのも惡くない。いゝ心を多分に持ちながら、隨分いやな心も働いたらしい有島氏の事だから、簡單にいゝ人だ、正直な人だ、親切な人だ、偉い人だ――と片づけるのはよくないに違ひない。

けれども、「テマの解けた氣持」の筆者のやうに、有島氏のいゝところを描いて居るつもりで、最もいやな一面を示したのはなさけない。眞に親しき友達であるならば、さう云ふ見當違ひはある可きでない。此の文題して「友はえらぶ可し」といふのは、主旨とする所こゝに在るのであつて、多少嘆息の調子を帶びてゐる事は申す迄もない。

有島氏は非常に女好きだつたさうである。女好と云ふと語弊があるが、たとへば里見弴氏が玄人との情合に身を盡す迄興がるのと同じ程度で、素人との「御交際」を熱心に求めたといふ事である。有島氏と親交のあつた或る女の人の話によると、しつつこい程親切で、且その女の人を介して更に他の女との交際を欲する事極めて切なるものがあつたさうである。彼の女の人を紹介して下さい、此の女の人を紹介して下さいと云ふやうに、それからそれと交際する事を求めたさうである。勿論それが、女學生の理想とする「清き交際」であつた事は疑ふ餘地が無い。

婦人に同情のある人で、且婦人に人氣のあつた人であるから、進んで自分の方から交際を求める際の人は別として、先方からせつついて來るのも極めて多く、恐ら

くは應接にいとま無き程であつたらう。由來婦人から交際を求められるのは文人の役得である。求める方から見れば、役者は奇麗だけれど怖ろしいし、文人は手間暇いらずに應じさうだと云うやうな心持も働くのであらう。曾て文壇の流行兒となつた事の無い自分の如きものにさへ、屢々手紙を寄せて交を求めた婦人が十指に餘る。未だ御目にかゝつた事は無いが夢に見ましたと云ふのがある。御兄樣と呼ぶ事を御許し下さいませと云ふのがある。寫眞を吳れと云ふのがある。何か肌に着けた物を吳れと云ふのがある。使ひ古した半巾を吳れゝば處女として最も淸く尊きものを差上げますと云ふのもあつた。何たる淸き交際であらう。

旋毛曲の自分は、返事をした事が無い。さあ、うむと御いひなさい、うむといへばいゝ物をやるぞと云ふやうな、人をみくびつた先方の態度が我慢が出來ないのである。但し內實かゝる根性を持つてゐる事を思ふ位だから、決して自慢してゐるのでは無く、寧ろさばけ無い心を悲んでゐるのである。

有島氏は博い愛を誰人に對しても持つて居た人ださうだから、あれ丈ぴりぴりした神經を他面には持ちながら、來るものは決して拒まなかつたのであらう。「テマの解けた氣持」の筆者の如きも、その博き愛に甘つたれてゐた一人らしく、自身いふ所によれば「ババサマと手紙の上でお呼び申してゐた」さうである。お兄樣と呼ぶ事を御許し下さいませと云ふ類であらう。

さうかと思ふと、遂に有島氏を引擦つて心中してしまつた波多野某女は、有島氏の事を「ブロウが、ブロウが」と呼び棄てにしてゐたと云ふ。而して「ババサマ」と呼んでゐた人も、流石に此の「ブロウが、ブロウが」はいさゝか耳觸りだつたと書いて居る。腐つた金魚の雌雄を判別する事は自分には不可能である。

「ババサマ」と呼ばれ、「ブロウが、ブロウが」と云はれて喜んでゐた有島氏の愛は何處迄博いのか、はかり知り難い。あんまり博過ぎて、相手をおもひあがらせた嫌がある位である。「テマの解けた氣持」の筆者の如きは、有島氏に對しては「ババ

サマ」と呼びながら、其の文中にあらはれてゐる態度を見ると全然對等のものと考へてゐるらしい。「筆の先でこそ隨分思ひ切つたいたづらも爲合つたものゝ、武郎氏の私生活には何らの交渉も持つてゐなかつた」といひ、「武郎氏の異常な直觀力には敬服させられてゐさしたし、お互ひの神經の尖端をいやが上にもとがらせて、ずゐぶん突つ込んだ筆の上の勝負を爭つたこともあるのでした」といひ、「その日の武郎氏は、私が氏の面に漂うてゐるかすかなその憔悴の影を見逃し得なかつたのと同じ高調した心の敏感さから、知らぬ間に經て來た私の內的苦悶のあとを、（透き通つた蒼白さ）の中に見出されたのでありませう」と云つて居る。如何におのれを高く評價し、如何に相手を低く見てゐるのであらう。若しそれでも相手を低く見てゐないと云ふならば、それは無神經である。いやが上にも尖端をとがらせた神經などゝ云ふものは見當らず、高調した心の敏感さとか云ふものも持合せてゐやうとは思へない。

殊に當人が海外へ行くのを東京驛に見送る有島氏と、その相手の人妻を「實際此の二人ほど私の眼を、心を惹いたものはありませんでした——慰め、ほゝゐませてあげたいと思つたくらゐでした」と記してゐるが、此の場合當人も共に悲しみ泣く可きで、涼しい顏をして、ほゝゐませてあげ度いと思つたとは、何たるいゝ氣なものであらう。

乍然、斯う扱はれて居る有島氏は如何なる態度で接してゐたのであらうか。「テマの解けた氣持」の筆者の描き出したところによると、「パパサマ」と呼ばれて、にやにやして居る姿しか想像出來ない。未だ御目にかゝつた事は無いが夢に見たといひ、御兄樣と呼ぶ事を許してくれといひ、寫眞をくれといひ、肌につけた物をくれといひ、使ひ古した半巾をくれゝば處女として最も淸く尊きものを差上るといふ不見轉と同じ程度迄、自分自身を甘くして相手を喜ばせたとしか思はれない。

「テマの解けた氣持」の筆者は、有島氏から、「此の間波多野さんから小さい御書

齋の中の御様子など詳しく伺つて……」といふ手紙を貰つたといひ、「澤山お友達がお出來だから……」と冗談半分皮肉な言葉を投げかけられたといひ、更に「マシマロなどと御自分でも言つていらしつた一頃に比べて見違へる程深みを増されたのをうれしくお見かけしました。そしてあの透き通つた頰の蒼白さ！」といふ手紙を貰つたと書いてゐるが、心ある人が讀むと、恐らくは冷汗を覺えざる事を得ないであらう。まるで同性の愛を弄ぶ女學生の手紙では無いか。

最後にもう一つ適切なる冷汗の例を引くと、「テマの解けた氣持」の筆者が、途上有島氏とすれちがつた後から直ぐに貰つた手紙には、「はづれかけた幌の上の眼が泣いてゐたが」云々と書いてあつたさうである。これ以上の殺文句があるだらうか。

非常に不愉快な事ではあるが、多分有島氏には、「テマの解けた氣持」の筆者が傳へるやうな、氣障なところも、いやなところもあつたのであらう。しかし、斯うたてつゞけにいやなところばかり見せられる事は、有島氏に、もつといゝところが澤山あつたらうと思ふ人間には堪へ難い。しかし前にも云つたやうに、筆者は決して有島氏のいやなところを世の中にさらけ出さうとしてゐるのでは無く、否其の反對に、いゝ人として描いてゐるのに違ひ無い。正にそれに違ひ無い。

其處が即ち下らない御交際を求め、ほんとうでない友達と甘え合つてゐた有島氏のふしあはせで、又自分が死屍に鞭打つが如き「テマの解けた氣持」に公憤を感じて、「友はえらぶ可し」と痛嘆する所以である。（大正十三年六月二十四日）

紙

屑

題して「紙屑」と云ふ。大正十年五月、雜誌「文章倶樂部」の質問に答へたものであるが、編輯者の御意に適はなかつたのか、何時迄經つても掲載されないので、一先づ取戻さうと思ひ、再三手紙を以て申入れたれど何等の挨拶に接せず、平生新潮社に好意を有する久保田萬太郎氏に談判を依頼したれど要領を得ず、荏苒今日に及んだ。たまたま「新潮」の爲めに小説一編を寄稿すべきやう勸說せられたので、來訪の記者に三年前の原稿の行衞を詰問したが更に要領を得ず、たぶん編輯者の手によつて破棄されたのであらうと推察し、果して然らば大に其の不都合を攻むる必要があると思つたが、なほ念の爲め文壇の大久保彦左衞門と稱する中村武羅夫氏に事の顚末を申送つたところ、意外にも原稿は新潮社の何處からか發見されたと見えて、やつとの事で返戻を受けたのである。自分にとつては捨て難いものであるが、「文

章倶樂部」の編輯者から見れば「紙屑」でなくてなんであらう。（大正十三年六月二十四日）

「文章倶樂部」の問に答ふ

問の一　創作氣分の湧く時、湧かない時。

△一日のうち、一年のうち。

答の一　朝が一番なれど勤人の身の是非もなし。嫌な夏の過ぎたる秋最もよろし。

問の二　よく書ける場所。

△旅、書齋、書齋の光線、其他。

答の二　あかるき書齋と思へど借家人の身のおもふに任せず。

問の三　原稿紙。

△色合、大きさ、紙質、其他。

答の三　無類の惡筆なればせいたくは申さず春陽堂製十行二十字詰の粗惡なるものにて滿足す。

問の四　ヒントの來る時、場所。

△夢、見たもの、聞いたもの、空想したもの。

答の四　愚問なり、ついでに剽竊したものと加へては如何。

問の五　書齋の置物。

△机、本箱、彫刻、繪畫、卓子掛、寫眞。

答の五　机の外は何も無いに限る。

問の六　創作氣分が作られるまで。

答の六　愈々愚問なり、答ふるところを知らず。

問の七　執筆中氣になる事。

△書齋の戸の開くこと、人の入つて來ること、訪問者。

答の七　何れも不愉快なり、殊に雜誌記者にやつて來られる事最も堪へ難し。

問の八　執筆中の癖。

△煙草、茶、菓子、酒。

答の八　何も欲しくなし。

追而煙草、茶、菓子、酒等を嗜む事を癖とはいひ難きやう思はる、嗜好とでも改めて頂き度し。

問の九　途中で書けなくなつた時どうするか。

△讀書、散歩、入浴、友人を訪ねる、活動、芝居。

答の九　やめてしまうまでのことなり。

問の十　どういふところで一番書けなくなるか。

答の十　一概には答へ難けれど自分の下手に愛想の盡る時書けなくなる事確實なり。

問の十一　作品中で苦心する點。

答の十一　徹頭徹尾。

問の十二　好み。

△女、花、酒。

答の十三　乍遺憾女は好きになれず、これ一生の不幸ならん、花はいかなる花にてもよし、殊に日本の秋草を好む、酒は甚だ好めども急ち醉拂つて氣焰をあげる相手など眞平なり、獨酌に限る。（大正十年五月二十九日）

はじめて泉鏡花先生に見ゆるの記

十一月二十七日は記念日である。大正五年の其の月其の日、はじめて泉鏡花先生に御目にかゝつた。

小學時代に「誓之卷」を讀んで以來、先生の作品によつて、自分は此の世に生れて來た甲斐のある事を痛感した。其處に描かれたる純情の世界は、屢々暗い心持に囚はれて、捨鉢にならうとする自分を救つてくれた。その感謝の意を表する爲めにも、一生に一度は御目にかゝり度いと思つて居たが、心置なくおつきあひ願へやうなどとは空想した事も無い。其の後自分が下手な小説を書くやうになつてからは、かへつて自分の鈍根を耻じて、此の願望を押へる心持が強くなつてしまつた。未見の人、殊に先方が自分の尊敬する人だと、一層おたづねしにくいのである。田舍から出て來る所謂文學青年などが、何處にでも大きな顔をして押かけて行くのを見る

と、自分などには到底及び難い生存力を持つて居るやうに思はれて不愉快になる。

なまじ小説なんか書かなかつたら、存外氣安く御目にかゝる氣になれたかも知れないが、紅葉先生時代の作家のやうな苦心も爲ず、それ丈の腕まへも無いのに、雜誌濫發時代の餘澤か、何時の間にか一人前の小説家らしく扱はれるやうになつたのは、かへりみて冷汗を覺える事である。冷靜に考へてみて、自分の作品の中にひとつたりとも後世に殘る可きものがあるか。どうせ一生の修行には違ひ無いが、それにしても餘りに前途が遠過る。處女作を發表してから足かけ十四年になる此の頃でも、自分は人前で自作の小説の話をされると、不覺にも顏が赤くなる。幾年の間、泉先生に御目にかゝる事を耻じ怖れて居たのも、斯ういふ心持が密かに潜在して居た爲めでもあつた。

大正五年の秋十一月、外國から歸つて來て間も無くの事、「三田文學」の産婆役の一人だつた慶應義塾幹事石田新太郎氏に對する謝恩會といふものが、丸の内の中央亭で開かれた。自分は旅疲をやすめる爲めに湯が原に行つて居たのだつたが、澤木梢氏から是非出席して貰ひ度いと云ふ手紙を受取つて、其の日あわたゞしく歸京した。集つたのは籾山庭後、澤木梢、小泉信三、井川滋、小澤愛國、久保田万太郎、久米秀治、山崎俊夫の諸氏で、主として「三田文學」をどうするかといふ問題について相談した。

その晩、久保田さんから、近いうちに泉先生を訪問しないかと云ふ誘を受けた。その時の會話は今でもよく記憶して居る。

「だつて變ぢやありませんか。僕なんかまるつきり御存じないんだから。」

「いゝえ、泉さんはあなたを知つてるんです。」

久保田さんは自分の方が先達である場合に必ず示す子供らしい嬉しさを顏にも聲にもあらはした。自分の留守中、泉先生の作品が出ると、漏れなく求めて送つて呉れるのが久保田さんの引受けてくれた役目だつた。久保田さんは手落の無いやうに

と常々心配してゐたので、何かの席で泉先生に御目にかゝつた時、その事を御話して、萬一漏れた物がありはしないかたゞしたさうである。其の時自分の事を泉先生に事細かに御聞きに入れたらしい。

「泉さんはあなたの歸つて來るのを待つてゐたんですよ。」

と久保田さんは繰返して云つた。まさかにそんな事があらうとも思はれなかつたが、久保田さんの、ちつともわだかまりの無い意氣込んだ話振に、自分もすつかり嬉しくなつてしまつた。少し厚かましい氣もするけれど、では思ひ切つて連れて行つて貰はふかといふ氣になつて、萬事を久保田さんに御任せした。

それから二十日ばかりたつた二十七日に、久保田さんをたよりにして下六番町の先生の御宅へ推參した。途中で久保田さんと待合せて電車に乘つてからも、麹町の大通で電車を降りて中六番町の方へ曲つてからも、自分の胸は平靜で無かつた。自分のやうな愛想氣の無い書生つぽは、一度で落第してしまひはしないだらうかといふ不安があつた。一藝に秀でた人の前に出る自分の、人間の出來てゐない事はなさけないものであつた。

遠くから見える大銀杏をゆびさして、

「あの樹の下なんです。」

と久保田さんに云はれると、愈々動悸が高くなつた。

久保田さんの開けた格子の中について入ると、玄關の障子をあけて取次に出たのは、銀杏返に結つたちいさい女中で、それが引込むと直ぐに、先生が御自分で出てゐらつしやつた。

「水上君を連れて來ました。」

と久保田さんが云つてくれたが、先生は吾々のやうにぬうつと一箇所に足をおちつけて立はだかるやうな恰好はなさらない方で、おそろしく小刻の足取りで、絶えず動きながら、

「さあ、まあお上り下さい、さあ。」

とこれも稍早目に云はれて、吾々が御免かうむつて上ると、今度は又非常なる勢で、とんとんと――んと二階に驅上つてしまつた。決して廣くない、隨分急な梯子段なのだが、その速い事、非凡なものであつた。

長火鉢をはさんで、先生と奥さんが差向でゐらつしやる景色の想像される茶の間を通つて、二人も二階へ上つた。

二間つゞきの三疊の方には、籐の寢椅子があつて、その上に搔卷と枕が、今迄人のゐた温みの殘つてゐる形のまゝであつた。あとで知つたのだが、これは萬年床で、先生が毎日日課のやうに晝寢をし、又樂々と體を延ばして――讀書もなさる場所なのである。

池田輝方氏と蕉園さんの筆になる、桃の枝をつつこんだ塗手桶を提げた若衆と、男人形を膝にのせて物思ふ娘の――たぶんお七吉三だらうといふ――對幅のかゝつてゐる床の間には、籠花いけに投入れの秋草がさしてあつた。

達棚には紅葉先生の御寫眞と全集が飾つてあつて、お供物がしてあつたが、その中の盃にたゝへてあるのはお酒かと思つたら、さうではなくて、紅葉先生の御好きだつた綠のお茶だといふ事であつた。

あらためて久保田さんに紹介されて御挨拶をしたが、その時不思議に思つたのは、泉先生のおじぎをなさる時の手つきだつた。兩手とも母指と他の指で輕い輪をこしらへ、甲の方を疊につけて頭をさげるのである。これも後で知つたのだが、極端なきれい好きで且もろもろの黴菌を誰にも增してこわがる先生は、疊の上に手をつく事を避けて居られるのであつた。

光淋風の楓の葉が、朱や群青や蒲黃の漆で描いてある大きな桐の火桶をはさんで、口不調法な自分は、先生が誘ひをかけて下さる御話に、持前の切口上を氣にしながら、氣の利かない事を云つてゐた。けれども自分が怖れてゐたやうな窮屈なおもひ

や、身を耻る心持なんか起させないやうに、先生の御話は面白く練れたものであつた。

東向の二階の椽側に近く、硝子のはまつた障子にぴつたり寄せた小机に、裸のまの硯と、筆が一本のつてゐた。それが先生の御仕事をなさるところで、ちいさい机は紅葉先生の遺品だとうかがつた。

驚いたのは此の室の兎だつた。違棚にも、本箱の上にも、小机の上にも、數限りなく、耳をつつたて、眼をくるくるさせてかしこまつて居る。手焙がある、狀さしがある、文鎮がある、香水の瓶がある、勿論おもちやは多勢である。陶器のもある、木彫のもある、土細工もある、紙細工もある、水晶のもある、硝子のもある、あらゆる種類の兎公だ。「女仙前記」や「後朝川」のやうな兎の働く小説のあるのも無理は無い。先生はステッキの頭にさへ、小村雪岱さんの圖案にもとづく銀の兎をつけて散歩の御伴を仰せつける。

先生は話上手だ。少しかすれた聲が座談には持つて來いで、紅葉先生御在世の頃の事をおたづねすると、當時の文壇の有樣や、作者の話をして下さる。水府の箱を膝のところに引つけて、合間々々に吸はれるが、とんと吸殼を灰に落して手から放す時は、必ずその吸口に千代紙でこしらへた赤坊の小指程の筒をかぶせる。これも矢張り黴菌よけで、敢て煙管と限らず、鐵瓶の口にもかぶせてある。もとより奥さんの御細工である。

お茶を飲む分量にも驚いた。焙じた番茶の色も香も冴えたのを、幾度となく女中が運で來る。少しおかはりの時がたつと、先生は大きい聲で催促なさる。尤も此の番茶の焙じ方は、奥さんが自得なすつた秘訣があるらしく、先生の御自慢である。誰が眞似をしても、その色と香を出す事は出來ない。

久保田さんは前に一度伺つた事があつて、その時は此の江戸つ子の口に合ふやうにと、鮪のいゝやつを刺身にし、外にも酒客の好物が數々並んださうだが、あには

からんや久保田さんはなま物を喰べない人だつたには驚いたと先生の御話だつた。

しかし久保田さんは大變醉つて折柄の大雪に俥を頂いて歸つたと云つてゐた。

二時頃から伺つて、餘り長座は失禮だと思ひながら、殘り惜くて立てなかつたが、國貞描くところの田舍源氏の本の表紙の貼まぜの屏風も暗くなつたので、そろそろ御いとましなくてはならなくなつた。けれども矢張り歸り度くない。其處で先生が御用で階下へ行かれた隙に、先生を何處かに御誘ひして、一諸に御飯を頂く事は出來ないだらうかと二人は相談した。

切出して見ると、先生はひどく困つた樣子で、實は今年は虎列刺が流行るので百日ばかりも外には出た事がなく、殊に喰べ物がこわいからうちでお豆腐と煮豆ばかり喰べて閉口してゐるのだ。こんな場合でなければ勿論同行するけれど、若し差支がなければうちで何か差上げませうと先生は云ふ。無理に御勸めしても惡いと思つたが、さう云ふ先生の樣子に、誘はれたのをきつかけに思ひ切つて外に出て見ようかしらといふ滿更でも無いらしいところが見えるので、黴菌の恐れの無い鳥でも煮て喰べるのなら間違ひはないのではないでせうかと思ひ切り惡く口說きたてゝ、たうとう御一諸に出かける事になつた。玄關で奥さんに御挨拶して、格子の外に出た。

何處に行かうといふあても無いので、先生の御馴染のところに連れて行つて下さいといふと、

「ほんとに鳥屋でよござんすか。」

と念を押して、昔から御贔負だといふ大根河岸の初音といふうちに行く事にきまつた。その頃の初音は座數の數も少なく、女中もさつぱりしたみなりで、物靜かに、客あつかひの親切なのが揃つて居て、大變氣持のいゝうちだつた。胴の太い德利の首のところの青いやうを、その後吾々は青首と稱して名物の一つに數へて居たが、そのはかりのいゝのには誰しも感歎したものだつた。さもしい話だが、或時盃ではかつて見たら、よその待合や料理屋などの一本半に匹敵した。

かねがね久保田さんは熱燗好きで、ぬるいのを好む自分はそれを「久保田燗」と稱してゐたが、泉先生のは熱燗を通り越した煮燗だつた。ぐらぐら泡を吹く青首の、とても素人には持てないやつを、指尖でつまむやうにして、

「なあに熱い方ならいくら熱くたつた平氣です。」

と云ひながら、お酌して下さるのであつた。

お鍋も強い火で煮詰めて、佃煮のやうになつたのに、多分に藥味をかけて、ふういひながら喰べる。煮燗も佃煮も、案ずるに黴菌を怖れる結果らしい。一體に生煮が好きで、葱なんか未だ眞白いのに小口ばかりわりしたの滲んだ位のが一番うまいと思ふ爲め、ついつい箸の動きの早くなる自分などゝ鍋をさしはさむと、先生は屢々、

「こいつは僕のにして下さい。」

と一區劃しきつて、やうやく思ふ存分煮くたらかしたのにありつく仕儀である。

誰に聞いたとも無く、先生は非常な豪酒だときめて居たところが、量は割合に少なく、ほんのり御酒が色に出ると、先生の御話は愈々面白くなり、自分は益々氣が置けなくなつて、何時迄もお別れしたくなくなつた。

それで初音を出てから、もう一度何處かで飲まないでは納まらなくなつた。

「弱つたな、又鳥屋なんだが、よござんすか。」

とその時往來のまん中で、少しふらふらしながら先生は立止つた。此の界隈なら何處でも御存じなのだらうと思つて居たので、實は意外だつた。先生の小説で自分の閉口するのは、江戸趣味といふのか江戸崇拜といふのか、不尠氣障なところであるが、目のあたり御目にかゝつて見ると、先生御自身には何の氣取氣も無い、あけつぱなしの所が難有かつた。鳥屋で飲んで、又鳥屋に行くといふのも、つまらない事のやうだが殊の外嬉しかつた。

今度の鳥屋は金喜亭といふのだつた。後藤宙外氏が「新小説」の主幹をして居た

頃の御連中の舞臺だつたさうである。

又お鍋がぐつぐつ煮詰り、熱燗の御酒の盃の數は愈々しげくなつたが、先生があの人とあの人と二人名ざした藝者はなかなか來なかつた。それでは爲方が無いから、その一人のうちのちいさい子を呼んでくれと頻に寂しがる。玄人讃美者として並ぶ者なき泉先生の御贔負はどんな人だらうといふ好奇心で、自分も少なからぬ期待を持つてゐた。「湯島詣」の蝶吉「起誓文」のお靜「婦系圖」のお蔦「白鷺」の小篠のやうな人でなければそぐはないと思ふと、幾度となく繰返して讀んで、その人達は生きて世の中に居るのと同じやうに親しくなつて居るのだから、今晩こそめぐりあへるのではないかといふやうな氣もするのである。殊に「日本橋」と眞正面から看板をあげた大作は、舞臺が舞臺なので、清葉もお孝もお千世も、其處いらの路地の奥から、駒下駄を鳴らして、先生の御座敷と聞いて馳けつけて來るのではないだらうかと想像して居た。

とんとんと梯子段を少しせき心で上つて來る氣配がしたと思ふと、すうつと襖があいて、若い藝者が廊下に膝をついて行儀よく頭をさげた。

「しまつた、こいつは勘定が違つて來たぞ。」

裾を引いて座敷にはいつて來たのを見て、先生は仰山に驚いて見せた。お酌時分から刺身のつまのやうにはべつたのが、何時の間にかいつぽんになつて居たのである。地藏眉の福德圓滿な相で、口數の少ないおとなしさうなひとだつた。年恰好から押して行つて、無理にもこの人をお千世にしてしまひ度かつた。

問も無く、前後して二人のひとが來た。年は自分などよりも二つ三つ上らしく、一切のとりなりが一見して此土地切つての大姐さんに違ひ無かつた。一人はすぐれて背の高い、裾を引いた姿の素晴らしくいゝ人で、目にしほのある。鼻筋のいかつくなく凉しい線を見せた上品な人だつた。

細りした頰に靨を見せる、笑顔の其さへ、おつとりして品の可い。此の姉さんは、渾名を令夫人と云ふ……十六七、二十の頃までは、同じ心で、令嬢と云つた。敢て極つた且那が一人、おとつさんが附いて居る。その意味を諷するのでは無い。其間のせうそくは別として、爾き風采を稱へたのである。

優しいながら、口を締めて——透つた鼻筋は氣質に似ないと人の云ふ——若衆質の細面の眉を拂つて……

と描かれてゐる「日本橋」の清葉に違ひ無いと思つた。

それは果してさうだつたが、もう一人を同じ作中のお孝に比べて見度い興味から、そつと先生に聞いて見たら、いゝえ違ひますといふ返事だつた。此の方は新橋とか赤坂とかいふ官員や軍人や成金の跋扈してゐる土地にはゐさうもない、一口に藝者らしい藝者といふやうな型の人だつた。話上手で、陽氣で、目はしはきゝながら邪氣の無い、これは名だゝる腕つこきに違ひ無いと思つた。

前のは先生が十三年間變らずつきあつてゐる人で、後のはそれよりももつと古く、むかし吉原にゐた十七八の頃からの友達だと紹介して下さつた。

「その頃此の人が登張に罰惚れしましてね——」

などと先生はからかつて居た。はつきりいへば此の二人は、日本橋の名妓壽ゞ江とお千代である。

その晩先生はすつかり醉つてしまつた。

「一寸でいゝから鳴らして下さいな。」

これも後で知つたのだが、先生は餘程醉が廻つて來ないと、さういふ註文はなさらない。そのかはり醉つて來ると、どうしても音樂がほしくなるらしい。

坐り直して、眞白ですべつこさうな膝子僧のはみ出すのを、そばの人がかくしてあげる位いゝ御機嫌で、

「横寺町の先生は、何が悲しいと云つて、しののめのストライキ程悲しいものはないつていひましたよ。」

などゝいひながら、意外にも極めて通俗な、一時代前の流行唄を、乍失禮全くの無技巧で一つ二つおやりになる。筆をとつては目もあやなる技巧派の本尊の、その無技巧がひどく嬉しかつた。先生にもかうした所があるのかと思つたら、自分は尊敬の外に、限りない懐しさを身に泌みて思つたのである。（大正十三年七月四日）

永井荷風先生招待會

永井荷風先生が三田の文科の教授となられたのは明治四十三年の四月で、「三田文學」の創刊號はその五月に出た。自分は其の時慶應義塾の理財科の二年になつたばかりだつた。

子供の時分から文學美術に對して異常な憧憬の念を抱いては居たが、自分が作家にならうとは思はなかつた。否、なれやうとは考へられなかつたのである。若し其の時永井先生が學校に御出でにならなかつたら、若し「三田文學」が創刊されなかつたら、自分は結局小說作家にはならなかつたであらう。或は「三田文學」の發刊以前に學校を卒業してゐたら、矢張り創作の筆を試る機會は無くて終つたらう。人の一生を支配するさまざまの機緣の不可思議を、自分は度々おもふのである。

それ迄、慶應義塾には、作家にならうと志す生徒などは殆ど一人も居なかつた。

夥しい數の生徒の大部分が、月給取になつて、後々重役になる事を夢見て居た。四圍の空氣が、藝術を娯樂として享樂する紳士を育てるには差支へなかつたらうが、藝術家をはぐゝむものでは無かつたのである。從而手近に先達を持たない自分の如きは、輕々しく文學の制作に從ふ事を只管もつたない事のやうに思ふばかりで、手の出しやうも無かつたのである。其處に突然永井先生がお出でになり、續いて「三田文學」が生れたのであるから、全く新しい世界が開かれた喜びであつた。此の時分の事は、曾て拙作「ものゝ哀れ」の中に書いた事があり、久保田万太郎氏も「半生」といふ隨筆の中で細かく述べて居る。

ですが其時分の塾の文科といつたら、それはお話しにならない位悲慘なものでした。本科と豫科とを合して學生の數がやうやく七人か八人——屋根裏の物置みたやうなところが教室で、其處に三四人の本科の學生が始終薄暗い顏をあつめてゐたのでございます。

すると豫科の二年生になつたとき、忽ち世の中がかはつて、文科に大きな改革があります。とにかく森先生と上田先生とが顧問といふことになり、永井先生の主宰で「三田文學」といふ雜誌が出るといふことになつたのです。

眞實に、私どもはそのときなんだか夢のやうな氣がいたしました。——世間でもあんまり思ひがけないのに驚いたやうでしたが、內部のものでさへ、さういつても隨分一時は驚きました。

「半生」の一節に斯う書いてある。多くをつけ加へる必要は無い、全く夢のやうな氣がしたのである。さうして、自分は理財科の教場を抜けて、文科へ傍聽に出かけるやうになつた。久保田さんのいふ「屋根裏の物置みたやうなところ」で「始終薄

暗い顔をあつめてゐる」數人の學生にまじつて、自分の崇拜する永井先生の講義を聽き、小山内先生の講義を聽いた。久しく欝屈して居た自分の胸に、何かしら明い希望が芽を吹いて來た。

忘れもしない四十三年四月十八日の始業日に、始めて目のあたり永井先生を見た。教室は「紅茶の後」の卷頭を飾る「三田文學の發刊」の中に、

自分はまた誠に適度な高さから曇つたり晴たりする品川の海を眺望する機會を得た。房州の山脈は春になるに從つて次第に鮮に見えて來た。品川灣はいくら狹くても矢張り海である。滿潮の夕暮、廣く連なる水のはづれに浮ぶ白い雲の列は、自分をして突然遠い處へ行つて仕舞ひたいなと思はせる事があつた。Chateaubriand が小說 René の篇中に「去ると云ふ堪へがたき羨望を抱く事なくして行く舟を眺むる能はず」と云つた一句を思ひ出す。

とあるその海を見晴らす位置にあつた。數人の見知ぬ文科の學生の後に、自分は畏怖と喜悅と羞恥にかたくなつて居た。次の時間からアルフォンス・ドオデエの小說を教科書に使ふと云ふ事だつた。

愈々「三田文學」が市に出た日の事もはつきり覺えて居る。同じ文科の教場で「薄暗い顔」の數人が、塾監局から貰つて來た一冊を開いて、頭をつき合せて居た。驚いた事には、その生徒達がまるつきり純文學に對する興味も知識も持つて居ない事だつた。

表紙を描いた藤島武二氏について、

「藤島つていふのは名の聞えてゐるゑかきかしら。」

と質問したものがあつた。

「さあ下手ぢあないんだらう。」

といふのが他の一人の答だつた。執筆者吉井勇、北原白秋、高村光太郎、長田秀

雄、三木露風、吉江孤雁、小島烏水諸氏の名を知つて居る者はたつた一人しか居なかつた。此の一人は他の者に一々説明を與へて居たが、それが其の後「三田文學」の編輯者として、親切叮嚀な月評を試みた井川滋氏であつた。此の人の月評は、近頃新聞の文藝欄を賑はす數多い月評の如く不用意亂暴見當違ひのものとは雲泥の相違で、集めて一卷とする價値のあるものであつた。惜い事には、氏は一切の筆を絶つて既に久しい。

けれども「三田文學」の出現は、吾々の心の底に潜んで居た藝術制作の欲求を力強く動かした。めいめいが密かに野心を胸にいだき、やがて名のりをあげる機會の到來するのを待つやうになつて來た。「薄暗い顏をあつめてゐる」連中の中に、もつといきのいゝ新顏が少しづゝ殖えて來た。

三田の生徒で、先づ「三田文學」にものを書いたのは、その頃既に卒業して普通部の先生になつて居た澤木梢氏で、第一卷四號に「ニイチエの超人と回歸説」が載のた。次は澤木氏より一年後に卒業して同じく先生になつてゐた小林乳木氏のツルゲネフの散文詩の譯である。顏だけはお互に知つてゐたけれど、口をきいた事の無かつた之等の人達との交りも始つた。誰の心にも創作熱が泉の如く湧いて來た。しかし「三田文學」のやうな立派な雜誌に出すのは羞しいし、又出してもくれまいから、自分達は手習の積りで、もう一つ別の同人雜誌を出さうといふ相談が起きて來た。主として松本泰氏と其の仲間の發起で、田町の鹽湯の二階に集つた。その時金釦の制服を着て、最も穩健着實な説を成したのが、當時未だ豫科の生徒だつた久保田万太郎氏である。幸か不幸か此の同人雜誌の計畫は流産したけれど、その席に列してから、自分の心の中には小説を書いて見たいといふ心持がはつきりして來た。

久しい間友達とのつきあひも絶え、一人で本ばかり讀んで居た自分を、突然澤木氏がたづねて來たのが口火となり、小泉信三、岡田四郎、松本泰三氏を加へて毎月一回宛會合する事になつた。別段名前をつけて置かなかつたので、例の會をやらう